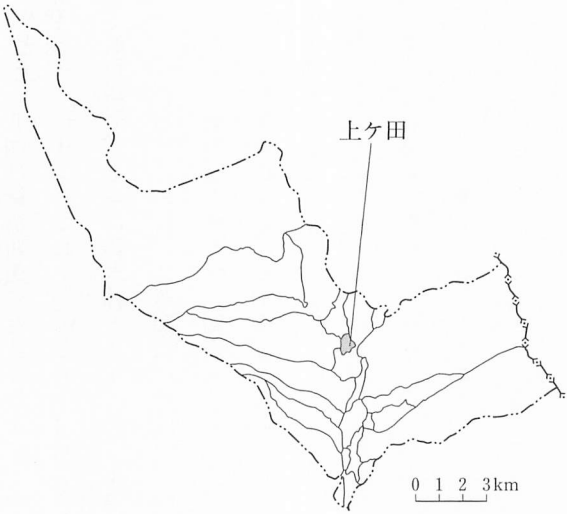
第二〇章　上ケ田

第一節　地理的概要

図表3－90　上ケ田の位置



水田が広がる上ケ田

上ケ田は山がちな富岡地区の中でも水田地帯という景観を持つ。「平坦ニシテ車馬ニ便ナリ田圃一面盤石ヲ布クカ如ク実ニ上ケ田ノ名ニ適シタリト云フベシ」(「地誌取調草案」)とあるように、黄瀬川と御宿の山に制約されながらも山裾に湧き出た水を用水にして水田を拓いた地区である。

位　置

上ケ田は裾野市中心部から北の方向に位置し、東西六一〇メートル、南北約一キロメートルの広さがある。さらに北約二〇〇メートルのところに、東西約一二〇メートル、南北約五八〇メートルの広さの飛地があるが、現在、ここは関東自動車工業株式会社の社宅地と東名高速道路となっていて、地籍図で確認できるだけである。東と北東及び南は御宿地区に囲まれ、北と西は金沢と葛山に接している。

地形と土地利用

北側は御宿新田の台状地形末端の急斜面がせまっており、西とその南側は金沢から続く低丘陵で、ともに雑木林とスギ・ヒノキの植林地となっている。そのほかは黄瀬川の形成した河岸段丘で、西方へ向かって緩やかに傾斜し、大部分が御宿のカロウト堰用水による水田地帯となっている。北の傾斜地と西の低丘陵の裾部は湿田で、一部は湧き水があって池となっていたという。この辺りを水源とする久保川が浅く浸食して低地を形成し、南へ向かって流出している。この久保川に沿って集落が南北に形成されている。

集落

集落の中心は、前ノ田と呼ばれる付近で、辻には一八七六(明治九)年の道祖神が建ち、そこから地区の主要な道が分かれる。とくに北から南へと向かう道には、旧戸と呼ばれる家々が並び、その南端で西に折れて上ケ田地区集会所および市立富岡保育園へと続く。保育園裏には共同墓地があり、現在、区で整理をして造成を行っている。ここには、もと浄念寺という寺があった。集落の東側には黄瀬川が流れ、その川岸には待合(字待谷田)という場所がある。ここにも旧戸が集まり、道祖神もまつられている。また上

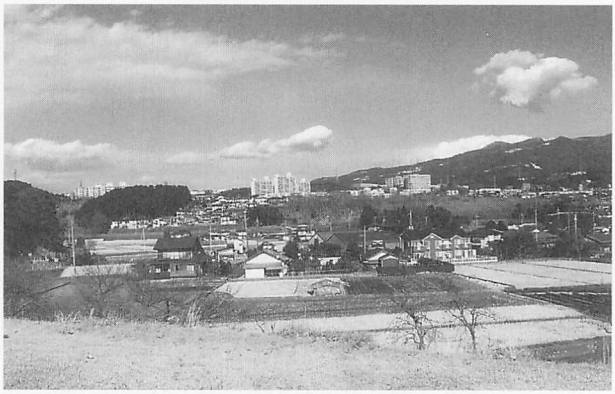


写真3－95　上ケ田全景
(左側に神明宮の森)

ケ田の氏神は神明宮であるが、集落の西端、葛山境近くにまつられている。

浄念寺は、葛山仙年寺末の浄土宗の寺であった。浄念寺は、今里の浄土院の中興開山文譽上人の生誕の地と伝える(『駿東郡富岡村誌』)。また共同墓地には区内の家々の墓があるが、家によって檀那寺が違う。柏木・勝又家は葛山の仙年寺、土屋・八木家は千福の普明寺(曹洞宗)、杉本家は今里の浄土院(浄土宗)となっている。

第二節　歴史概要

1　中世

金沢手城山跡　上ケ田の原始・古代までは、遺跡や資料がないので明らかでない。

上ケ田の集落から葛山の字源太海道へ出る中程に、手城山という金沢の飛地がある。そこには、かつて高さ約二五メートルの頂部の平らな小丘があり、小祠をまつってあったが、土取工事によって消滅してしまったという。一九三七(昭和十二)年、ここを踏査した沼館愛三は、葛山にある葛山城の出城であろうとしている(『市史』一－八五号)。

葛山氏一族の支配　大森・葛山系図によると(『市史』二－付録系図集)、葛山氏の祖惟忠の三男景忠は上田殿、兄惟重は御宿殿とあるから、一族の所領であったと考えられる。葛山氏系図には、このほか金沢殿、伊豆佐野・土倉領主、平山法橋、平山律師、中里小五郎、金屋宮原領主など、一族にはこの周辺の地名にちなんだ人々がおり、これらの地域を開発して土着し領主となったとも推測できる。

中世後半までは葛山氏一族の領域であったと考えられるが、資料がなく不明である。一六世紀の後半、葛山氏の転退後、後北条、武田、徳川と支配の変遷があ

り近世をむかえる。

2　近世

支配と村高

支配は、一六三二(寛永九)年以降幕領、一六八〇(延宝八)年以降小田原藩領となり、一六八三(天和三)年以降幕領に戻っている。市域では唯一相給の村で、東分は一六九八(元禄十一)年以降旗本松平氏領分七六石余、西分は一七〇五(宝永二)年以降旗本安藤氏で八〇石余を領有し、幕末に至っている。その支配は、東分の松平氏が大坂城や甲府勤番の要職を勤めたため財政難で年貢が重く、これに対し西分の安藤氏は「人民を愛すること子の如く」といわれる善政であったという(『駿東郡富岡村誌』)。このように、一村を二人以上の領主が領有する知行形態を相給と呼ぶ。

村高は、正保郷帳一一一石余、元禄郷帳一五八石余、天保郷帳一六〇石余である。旧高旧領取調帳では西分が安藤左兵衛知行八〇石六斗三升七合、東分が松平時三郎知行七六石九斗三升と出ている。

上ケ田村の概要と村方騒動

寺は葛山仙年寺末の浄土宗浄念寺(除地一石四斗余)、氏神は神明社(除地七斗余)である。陣馬、兜石など頼朝伝説に関連した伝承を有する地名を伝える。

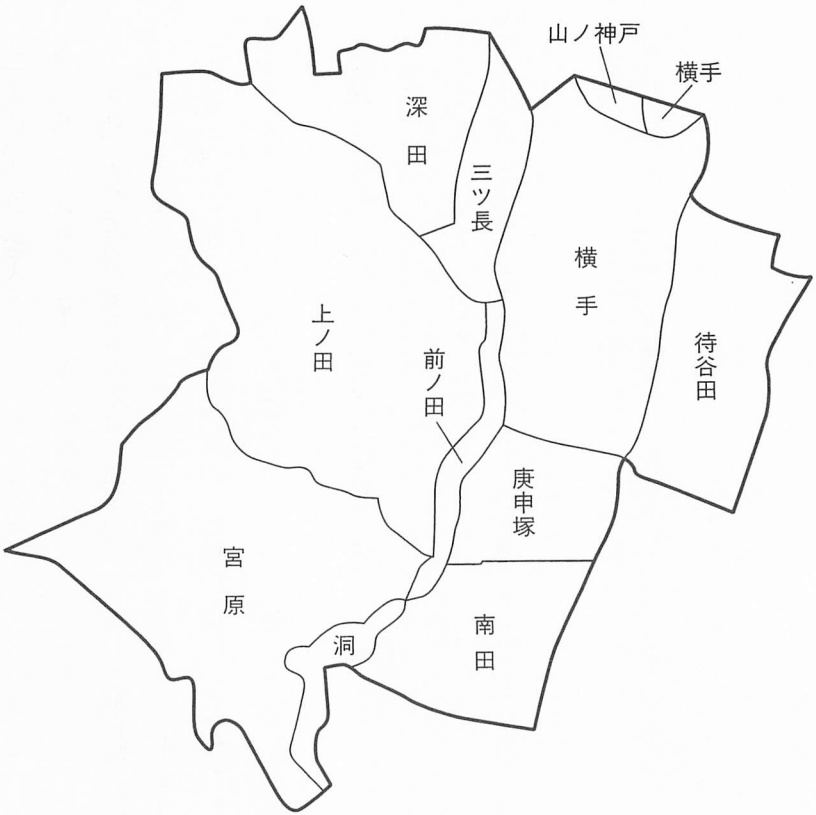
一五九九(慶長四)年八月、以前の肝煎(名主級の村役人)新七郎が迷惑であるとの小百姓の訴えで、九月二十九日に御宿村の宮内左衛門(湯山家)が横田村詮から肝煎に命じられた。横田村詮というのは、当時駿河国を治めていた中村氏の重臣である。

3　近現代

行政区の変遷

近世の上ケ田村は、一八七二(明治五)年の大区小区制の導入によって第一大区五の小区へと編入され、一八七四(明治七)年の大区小区制の再編により、市域の水窪以外の村々と

図表3－91　上ケ田の字



図表3－92　上ケ田の字一覧

上ノ田(ウエノタ) 庚申塚(コウシンヅカ) 深田(フカダ) 洞(ホラ) 前ノ田(マエノタ) 待谷田(マチヤダ)	三ツ長(ミツオサ) 南田(ミナミダ) 宮原(ミヤバラ) 山ノ神戸(ヤマノカミド) 横手(ヨコテ)

ともに第一大区三小区に編入された。そしてこの大区小区制も、一八七八(明治十一)年の郡区町村編制法によって廃止され、再び近世以来の上ケ田村に民選の戸長が置かれることになる。しかし、一八八四(明治十七)年には戸長公選制を廃され、戸長の官選と戸長役場管轄区域の改定がなされた。そのため、黄瀬川を境に市域は東西に二分され、上ケ田は「御宿村ほか一〇か村」の区域に組み入れられ、戸長役場は御宿村に置かれることになった。

一八八八(明治二十一)年、市制町村制の公布により、翌八九年に須山村・富岡村・深浪村・小泉村という四つの行政村が誕生し、上ケ田は他の一〇か村とともに富岡村に属すことになった。財産規模の小さい須山村は富岡村と町村組合を設けて、須山村富岡村組合村を結成した。組合村役場は富岡村に置かれ、組合村長も富岡村出身者が務めた。その後、一八九九(明治三十二)年に町村組合を解消し、富岡村と須山村は独立した行政村となった。

戦後、一九五二(昭和二十七)年に小泉村と泉村が合併して裾野町が誕生した。さらに、一九五六(昭和三十一)年には深良村が、一九五七(昭和三十二)年には須山村と富岡村が裾野町に合併して裾野町となり、一九七一(昭和四十六)年に市制が施行され、現在の裾野市となった。

戸数と人口

一八七五(明治八)年の「小区表編立調査」によれば、家持三二戸、人口一六一人(男八七人・女七四人)となっている。一八八八(明治二十一)年頃の「御宿村ほか一〇か村、自治区造成に関する諸表」では、三四戸、二〇七人である(『市史』四-三四二号)。また、一九二五(大正十四)年には四三戸、三二九人である(「大正十四年度富岡村事務報告」)。ちなみに富岡村の人口は、一九一七(大正六)年が四二七二人、一九二七(昭和二)年が五二五五人、一九三七(昭和十二)年が六一七六人となっている。

一九七〇(昭和四十五)年の国勢調査によると、人口は三五〇人、七五(昭和五十)年には七五世帯、三六二人(男一七四人・女一八八人)である。これは、一八七五年の統計に比べると世帯数では約二・三倍、人口では約二・二倍の増加となっている。また一九九五年には、一二〇世帯、四三八人である。

農産物と竹行李製造　一八八六(明治十九)年の「地誌取調草案」では、田一三町五反八畝一二歩、宅地一町九反八歩、畑四町七反九畝六歩、野地八町一反五畝三歩と、畑よりも水田が多い。また字地として、待合田、横手、南田、洞、宮原、三ツ長、深田、上ノ田などがあげられている。また馬が一二頭いて、二軒に一頭の割合で飼っていたことになる。

一八七五(明治八)年の「小区表編立調査」の職分表では、農業に従事するものは九四人となっている。また前述の「地誌取調草案」では、物産に米・麦・三椏・製紙等をあげている。さらに、やや時期は下るが大正初期に編まれた『駿東郡富岡村誌』には、「特殊農産物ハ玉蜀黍約百俵ヲ得タリ」とある。これは総戸数四〇戸で一戸当たり平均二俵内外であるという。また同書には、一八九一(明治二十四)年頃から須山村より竹行李製造が伝わり、上ケ田では一か月二百個、年間二千四百個を製造し、工場数も三か所にあったと記されている。

学校　明治以前は、浄念寺で寺子屋が行われていた。やがて、一八七二(明治五)年に学制が頒布され、上ケ田は金沢・御宿・葛山・千福とともに行餘舎を設立する。さらに一八七六(明治九)年には、富沢・定輪寺・大畑が行餘舎の定輪寺の分校を設置する。一八八二(明治十五)年には行餘舎は校舎を新築し、嶽南小学校と改名した。この経費のうち、建設場所は御宿の湯山半七郎家の所有地を借用し、費用も各村の代表者の寄付金で賄うこととなっていたが、新築費用は当初の予算を上回り莫大な不足金が残った。そのた

め、翌年には上ケ田・金沢・葛山・千福にそれぞれ初等科のみの分校を設置して各村に学資金を返賦し、分校の運営維持を各村に任せることとなった。その後、初等科のみの分校は千福と葛山に設置され、金沢の児童は葛山分校へ、上ケ田の児童は本校へ通うことになり、不要になった本校の南北両袖の初等科教室は売却されてその代金で不足分を賄うことが考案された。

一八八六(明治十九)年、県の布達を受けて県内の学区が大幅に統合されることになり、今里舎と下和田の開昇舎そして須山学校が嶽南学校に統合された。通学の困難を考慮して、須山と下和田の学校を嶽南小学校の分校とし、今里の子どもたちも下和田の分校に通わせることとした。

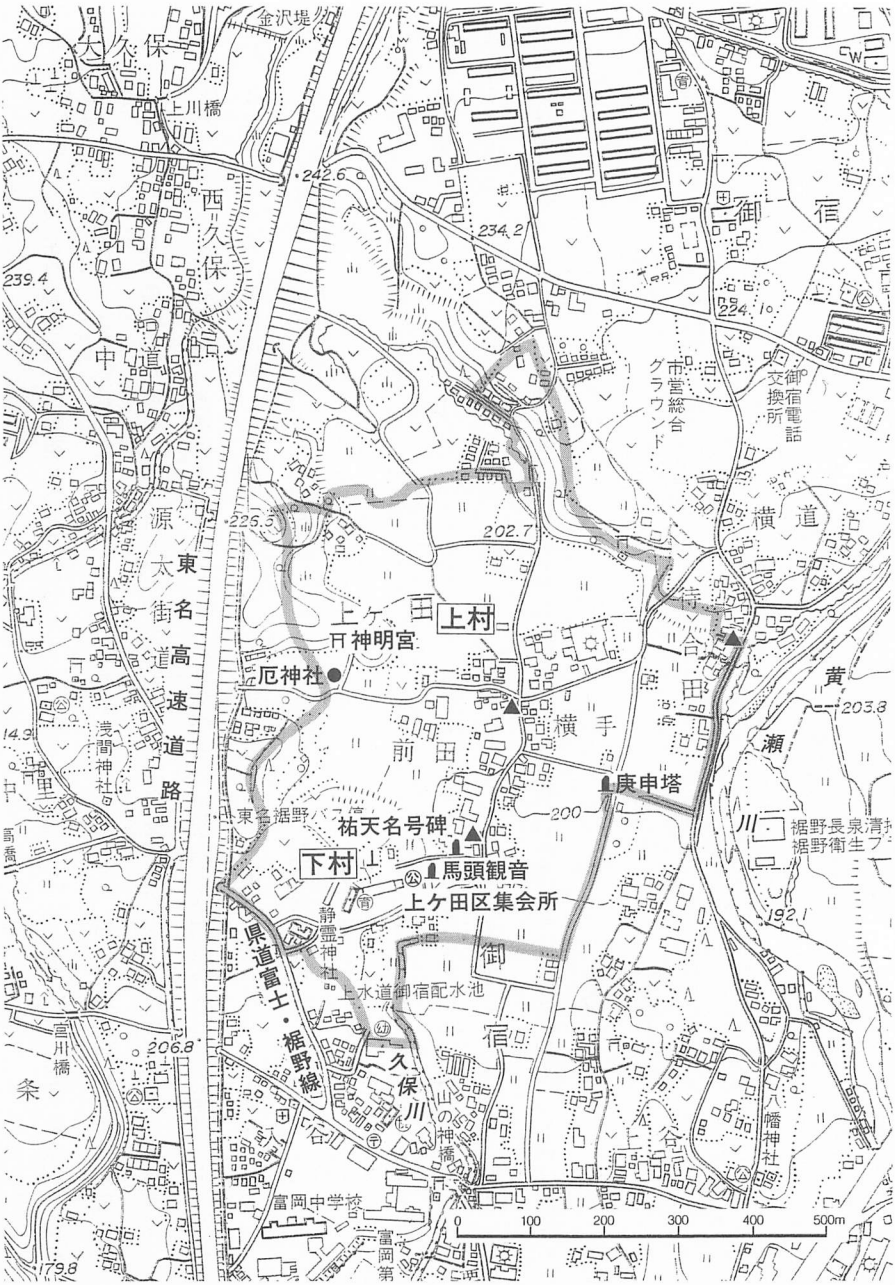
その後、いく度かの制度的変更、名称変更があり、現在の裾野市立富岡第一小学校となった(第二一章御宿参照)。

第三節　地域社会と生活

生業の変化

「農業センサス」によると、一九六〇(昭和三十五)年の総戸数は四二戸、農家数は四一戸とほとんどが農業に従事していた。しかし、一九九〇年には総戸数一一〇戸と三倍近く増えているにもかかわらず、農家数は三六戸とやや減っている。このうち専業・兼業別は、六〇年には専業が七戸、第一種兼業が二一戸、第二種兼業が一三戸であったのが、九〇年になると第二種兼業のみとなっている。作物類別収穫面積では、稲が一五・九から四五・〇ヘクタール、麦類・雑穀が二一・〇から〇・五ヘクタール、いも類が一〇・九から二・三ヘクタールと、畑作物の多くが減っているが、花き類は〇から七二・〇ヘクタールと圧倒的に増えている。おそらく芝生の栽培と無関係ではないだろう。

図表 3 - 93　上ケ田の集落



村内区分と区の役職

上ケ田は現在は一一の組に区分されているが、そのほかにカムラ(上村)とシモムラ(下村)という二つの区分がある。このほか御宿新田境に待合という集落があり、道祖神もそれぞれ三か所にまつられている。明治中期には三四戸ほどの戸数であったことから、従来からこの三つの単位があったと考えられる。現在、上村は従来の五・六組と待合の八組に新しい家々の七組が加わり、下村は一～四組に一一組が加わっている。上村と下村は、宮世話人二名を隔年で相互に選出することになっているほか、葬式の際には葬式組となって互いに助け合う組織となる。神社の宮世話人が所属する二つの地区で祭りの準備などをする。

区の役職には、区長・副区長・会計各一名、相談役三名、協議員四名、集会所館長一名、神社総代三名、会計監査二名、組長一一名のほか、子供会会長、体育委員長、自主防災会会長、婦人会会長、老人会会長などがある。このほかに、水門番・水配人・水利組合議員各一名がいる。水門番は、御宿新田と上ケ田境にある水門の管理をする役で、水門に最も近い家が委託されている。水配人と水利組合議員は、深良用水に関わる重要な役で、水田の用水の管理を任されている。なお、大正期の『駿東郡富岡村誌』によれば、用水掛りの田は九町三反七畝となっている。

区長・副区長・会計・相談役・協議員などや各種団体の委員長や会長などによる拡大役員会を、年に六回ほど開く。また、二月最終日曜日に定時総会を開いて年間の活動報告や集会所使用状況報告、各種団体等の会計報告のほか、翌年度の新役員の承認などが行われる。新旧役員の引継は、三月最終土曜日に慰労会を兼ねて行われる。

共有地

現在、上ケ田の共有地は旧戸といわれる古くからの住人が共同で所有しているものである。それらを、共有する人数に応じて三五人持ちあ

るいは四四人持ちなどという。集会所や共同墓地などがそれにあたり、旧戸だけではなく区全体の共有物として、管理運営されている。

神明宮と式年遷宮

上ケ田の氏神は神明宮である。「神社明細帳」によると祭神は天照大神と豊受大神とあり、一七八一(天明元)年に創立され一八七五(明治八)年に村社に列せられたとある。また、棟札には一六七二(寛文十二)年再建のものがある。また、一七八一年に伊勢神宮から分霊をいただいたという伝承があることから、何度か遷宮をしていた形跡であると考えられる。このほかに山神社と大六天神社がある。山神社はもと山神戸にあり、一八三九(天保十)年に創建され、一九〇九(明治四十二)年に村社神明宮に合祀された。また大六天神社は一六二五(寛永二)年に創建され、一九〇七(明治四十)年に神明宮に合祀された。神明宮の祭りは、例大祭が九月十六日であったが現在

写真3－96　集会所から遷される御神体

写真3－97　行列に参加した稚児

写真3－98　厄神社の祭り

は月遅れの十月十六日に近い日曜日に行っている。また、風祭りは二百十日の前の日曜日、風納めは二百二十日前の日曜日に行う。新嘗祭は十一月二十三日に近い日曜日、歳旦祭は十二月三十一日、新年祭は元旦、祈年祭は二月十一日に近い日曜日に行う。例大祭には神事の後、子ども神輿や集会所での余興などが催される。

神明宮では、一九八八(昭和六十三)年に遷宮式が行われた。これは伊勢神宮の式年遷宮にちなむもので、天明年間の棟札からすれば上ケ田では約二〇〇年ぶりの行事であった。このときには御神体を集会所に一時安置し、社殿改築および境内整備を行った後、御神体を改築された社殿に遷した。これは夜間に行われ、子どもたちも稚児や巫子として、行列を組んで神輿に従い、地区全体で祝った。

そのほかの祭り　神明宮の境内には、厄神社と八幡神社および三嶋神社もまつられている。厄神社は、一九七二(昭和四十七)年に山神戸にまつられていたものを遷した。祭りは七月二十三日に近い日曜日に行われ、供物の赤飯を区民がいただくのが習わしである。厄神さんと呼ばれており、流行病があったときに

まつり始めたといわれる。

上ケ田集会所は、もとの観音堂で、現在も観音がまつられている。祭りは八月十七日だが、現在はそれより前の日曜日に行われる。念仏講によって念仏があげられ、集会所前の広場で子ども相撲が奉納される。夜には盆踊りも催される。なお、毎月十七日には念仏講がある。

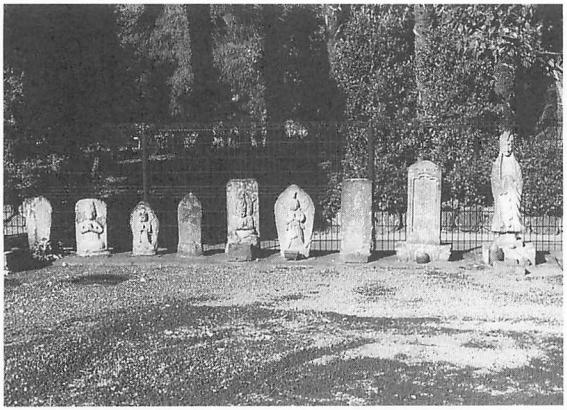


写真3－99　集会所脇の馬頭観音群

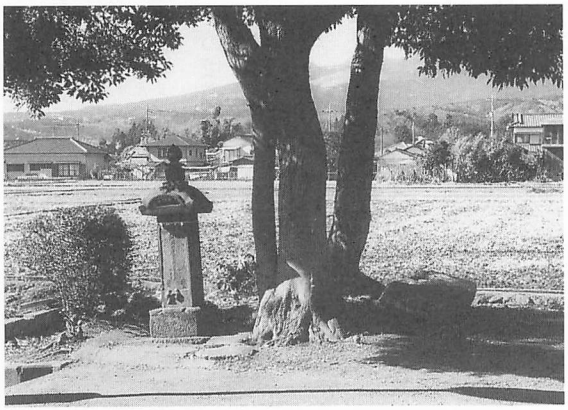


写真3－100　庚申塚の庚申塔

水源と水道

上ケ田の水源は、北側の山がせまった裾部に広がる低地に湧き出したもので、一九四六(昭和二十一)年には赤痢が流行し水源を同じくしていた多くの人たちが罹った。このほかにも、井戸のある家の水を使ったが、御宿新田と葛山の中里などとともに、黄瀬川の小鍋田(こなべだ)の湧水を引いて富岡水道にしてからは水の苦労がなくなったという。

馬頭観音坂にあった石造物

上ケ田の石造物の多くは、上ケ田集会所の敷地内と神明宮境内に集中し

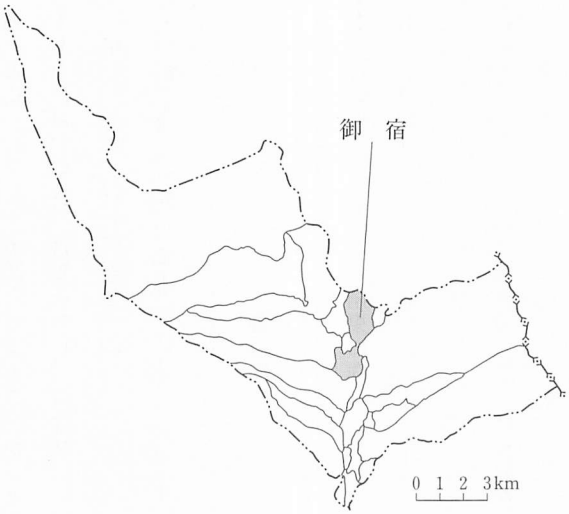
ている。前述したように集会所はもと観音堂と呼ばれ、集会所敷地内の石造物には馬頭観音一二基と順礼供養塔四基などがある。おびただしい数の馬頭観音は、もと待谷田の一角にまつられ、そこから馬頭観音坂と呼ばれる御宿新田に至る坂道が続いていた。この坂道が急なため、ここで馬が死んだりしたという。

神明宮境内には、先の遷宮式で建てられた記念碑や石灯籠、狛犬などのほか一七四五・四六(延享二・三)年と一八五一(嘉永四)年の石灯籠がある。このほか、集落東側の庚申塚というところには一六六九(寛文九)年の庚申塔が建てられている。また道祖神は三基あり、一基は待谷田に、二基は前ノ田という場所にある。市域でも珍しいのは、祐天(ゆうてん)という遊行僧が建てた名号碑が集会所近くにある。これは一八四七(弘化四)年に再建されたものである。

第二章　御　宿

第一節　地理的概要

図表3－94　御宿の位置



街道の「宿」御宿

黄瀬川を挟んで東には佐野、西には御宿と、周辺地域の政治経済の中枢をになってきた地域がある。どちらも街道に面して街村的な景観を持っており、「宿」という名が付けられてきた。

御宿には、湯山三家と中川家という旧家がある。この四家で、近世には名主等をつとめ、近代にはいると政治経済や教育の指導者として、御宿ばかりでなく富岡地区、駿東地方にも大きな影響力を持っていた。御宿は、市域西部および北部地区にあって、富岡地区における行政や教育の重要な位置を占めている。

位　置

御宿は裾野市街の西北部、黄瀬川の西岸に位置し、地域でみると上ケ田を中にはさんで、大きく北と南の二つに分かれている。この二つの地域をつなげているのは、黄瀬川西岸の字待合から新

田に通じる約三〇〇メートルの道路だけである。東は黄瀬川をはさんで石脇、深良、岩波に対し、西は葛山、南は千福と接し、北は大野原に面している。

地形と土地利用

北の新田は南北約二・二二キロメートル、東西約一・一キロメートルの広さがあり、黄瀬川を境として東と北は岩波と深良、および御殿場市に接し、西は金沢、南は上ケ田と接している。この地区は富士山の広大な裾野地帯で、北西から南東に向かって緩やかに傾斜し、北は起伏があるが黄瀬川の河岸一帯は台状の平坦地となっている。ほぼ全体に火山砂礫と岩屑に厚く覆われ、スギ、ヒノキの植林地と雑木林が混在している。南の平坦地の表土は火山灰が堆積して黒色土層が形成され、開墾されて畑となっていた。近年、トヨタ東富士研究所、関東自動車工業と関連企業、矢崎総業などの本社や工場、住宅地となって、景観は大きく変貌した。

南の御宿は、東西南北約一・二キロメートルの広さがあり、東は黄瀬川を隔てて深良と石脇に対し、西は佐野川を境として葛山と接し、北は上ケ田、南は千福に接している。北の字大林から南の宿頭までの黄瀬川西岸地帯は、かつての黄瀬川氾濫原で、南北に縦縞状の微高地と旧河道を示す凹地となっている。凹地は御宿堰(古堰)用水によって開かれた水田で、微高地は雑木林や畑となっている。

中央部は、黄瀬川の形成した河岸段丘で、御宿新田字川窪のカロウト堰用水による水田地帯となっている。この地区の西側を久保川が流れて上ケ田地区から浸食谷を形成し、蛇行しながら千福地区へ流下している。

佐野川を境として葛山中里と接する地区は、中里から続く富士山東南麓の台状地形をなし、その南端は隆起して海抜二一六メートルの独立丘陵となっている。台状地形の佐野川に沿った地区は、溶岩が地表に現れ、岩屑や火山砂礫が堆積し、その他のところは火山灰地となっている。台地斜面や丘陵はスギやヒノキの植林と雑

木林であったが、近年、東名高速道路が通過し、地区もまた宅地化して大きく変貌している。佐野川は基盤の溶岩を深く浸食して峡谷を形成し、景ケ島という景勝地になっている。集落は南端の宿、宿畑および金谷、宮原地域に形成されている。

集落　御宿は、上ケ田を間にはさむように、北の新田と南の御宿に大きく分かれている。南の御宿は、いくつかのモヨリ(最寄)と呼ばれる伝統的な集落によって構成されている。最寄は行政上、区と呼ばれる単位とほぼ重なるが、必ずしも同一ではない。

御宿の西側に位置し、南北に長い宮原は、字としては御宿、葛山、上ケ田にまたがっている。以前は二戸しかなく、キツネが出るようなところだったといい、最寄としては入谷に属している。しかし現在、この宮原は戸数が急激に増えて七、八〇戸になり、内部は入谷区三組と坂上区になっている。御宿のほぼ中央に位置する入谷は、もとは坂上を含んでいた。坂上は入谷が一七戸のとき(明治十九年ごろ)には家がなく、その後、役場ができて家が増え、御宿を五区に分けたときに区となった。その東には上谷、南に平山と呼ばれる最寄がある。御宿は平山から上谷、入谷、坂上という順に拓けていったという。

一方、新田は最寄のひとつと捉えることができ、新田区をなしている。以前は一〇戸から一三戸くらいで、その後一九四〇年代までは二五戸だったという。

第二節　歴史概要

1　中世以前

考古遺物の発見　一九六五(昭和四十)年、御宿新田字横道の杉本久喜宅で浄化槽の設置のため地表下一・五メートルから一・七メートルまで掘り下げたところ、表土から六〇センチメートルで黒色土層となり、その下部から縄文時代

中期後半の土器と磨製石斧、石棒、磨石が発見された。また一九七五(昭和五十)年頃、字六反(ろくたん)で、縄文時代中期の土器片、一九八五(昭和六十)年には字坂下(さかした)でやはり縄文中期の土器片と石鏃が採集されている。いずれも山麓の海抜一九〇から二二〇メートル前後の平坦面で、約五〇〇〇年前からこのあたりに人が住み始めたことがわかる。さらに景ケ島の東からも縄文時代土器片と六世紀頃の土器片が採集されたという。

一方、一九七五年から八四年にかけて、字宮原では弥生時代後期(紀元二から三世紀)の土器片が発見された。宮原は海抜二〇〇メートル前後の台状地形のところである。土器片は深鉢か甕形土器の口縁で、上縁に櫛歯で横引きした波状文とくびれ部に、櫛歯で二・三センチメートルの間隔で押し引きした簾状文という文様を施したものである。この文様の土器は長野県から山梨県に分布する土器で、この地域との交流を示す貴重な史料である。

地名の由来

えらい人たちが泊まる宿場があったということで、「おんやど」ということから御宿になったという伝承がある。頼朝(よりとも)伝説に関連して語られることが多く、一八八六(明治十九)年の「御宿村外拾ケ村地誌取調草案」にも「建久四年五月征夷大将軍右大将源頼朝、富士野ヲ猟スルトキ本村湯山右近ノ宅ニ泊ス」と記されている。これは史実ではないが、人々の歴史意識を示していて注目される。一方で、葛山氏一族の御宿氏から取ったという話もある。この御宿氏とは、駿河郡御宿を名字地とする在地土豪で、諸系図によれば葛山氏の一族であった。

古代・中世の御宿

『駿河記』によると、旧村名は野村であったという。この『駿河記』や『駿河志料』によれば、建久年間に源頼朝の巻狩りで宿舎となったところから御宿というようになったとある。「大森・葛山系図」(『市史』二　付録系図)によると一一九三(建久四)年、葛山惟忠(かずらやまこれただ)の子惟重(これしげ)の代に、源頼朝の藍(あい)

沢御狩のときの御宿を提供したので御宿と号したという。

鎌倉時代以降、中世を通じてこの地域に本拠を置いた大森氏と葛山氏は、その祖を藤原北家としている。ともに藤原道長と関白の地位を争って敗れた藤原伊周の流れで、その子が忠親、さらにその子が惟康で、その子のうち葛山氏の祖とされる惟兼に続く惟忠のあとに惟重となる。この惟重が始め竹ノ下孫八郎と号し、のちに御宿殿と呼ばれた人物である。惟重の四男重朝からは御宿氏と称しているが、この御宿氏は、浅羽本系図(前出系図)によると、重朝の子は惟盛となっている。

御宿友綱　一五七〇(元亀元)年十二月に武田氏が深沢城の北条氏を破って手に入れた駿河郡内の葛山氏の支配領域を引き継いだのは、御宿監物友綱であった。友綱は、武田氏に仕え、葛山信貞の軍代を務めていたとか、医術に長けていたなどと伝承されている。また友綱は、一五八〇(天正八)年に、それ以前に数度にわたって武田氏から与えられた給地を息子若丸(綱貞)に譲渡している。このように、武田氏の一家臣として葛山氏の支配を受け継いだ御宿氏は、武田氏の滅亡の後は小田原に居住し、北条氏に仕えたようである。一八八六(明治十九)年の「御宿村外拾ヶ村地誌取調草案」千福村の条に、御宿監物の墓は千福村の普明寺の境域にあり、普明寺の僧が記念碑を建立したが、今はなくなり、伝説のみが伝わっていると記されている。また普明寺境内は御宿正倫の営んだ城の跡だとしている。

2　近世

支配と村高　支配は、一六三二(寛永九)年以降幕領、一六八〇(延宝八)年以降は小田原藩領、一六八三(天和三)年よりまた幕領に戻り、一六九八(元禄十一)年には伊丹家徳美藩領となったものの、当主の自殺によって数か月で幕領に戻り、一七〇六(宝

永三)年以降、小田原藩支藩の大久保家荻野山中藩領となって明治維新を迎える。検地は一六〇四(慶長九)年と一六七四(延宝二)年の二回行われた。村高は、正保郷帳二五〇石余、元禄郷帳、天明郷帳、天保郷帳では三八六石余、旧高旧領取調帳では三九二石余である。村高でみると三七二石余のうち、田方一九九石余、畑方一七三石余でほぼ等しいが、面積では田方が一六町五反余に対し、畑方五一町余と畑方が三倍以上あり畑が目立っている。山手役米は六斗二升四合である。

愛鷹山の山裾、黄瀬川の西岸に位置する御宿村は、村内で沼津・御殿場を結ぶ街道と須山街道が並行しており、地方交通の要衝でもあった。

寺院と氏神

一七九七(寛政九)年の「駿河国駿東郡御宿村明細村差出帳」によれば、寺院は浄土宗京都知恩院末荘園寺(除地一石四斗)、禅宗千福村普明寺末向西寺(除地二石七斗二升)があり、荘園寺支配の地蔵堂もあった。ほかに公文名村法玉院支配の喜経院(寄鏡院とも書く。本山派)に山伏が三人いる。氏神は、八幡宮(除地二石二斗三升余)で、山之神宮や駒形之宮などの名も見える。

一方、一六六二(寛文二)年の宗門人別帳によると、村内の百姓たちの檀那寺は、源広寺(村内)八軒、普明寺(千福)一七軒、仙年寺(葛山)一三軒、長教寺(水窪)三軒、浄念寺(上ケ田)四軒、光長寺(沼津市)一軒と分散している。源広寺は荘園寺の前身の寺で、近世初期に湯山氏によって創建された。当時は湯山氏の「氏寺」としての性格を持っていたようで、その後一時廃寺となり宝永期に再建されるが、その際に湯山一族に加えて、他の百姓も檀家として加わっている。

同様に、八幡宮も、元来神官であった湯山氏によって創建され、中湯山家の当主が代々鍵取りを勤めている。しかし、元禄期に寄進された灯明には村内の多数の百姓の名が刻まれていて、当時すでに「村の神社」としてまつられるようになっていたことがうかがえる。

写真3－101　御宿古堰

御宿に暮らす人々

一七〇三(元禄十六)年の「反別名寄控帳」の末尾に「御宿村名字」として村内の百姓の苗字が記されている。それによると、村には当時、湯山・中川・勝又・真田・西河・外川・磯部・黒部・杉山・小磯・岩瀬・大野の一二姓があった。また一七九七(寛政九)年の「村差出帳」によれば、家数は七一軒、人数三二五人(男一七〇、女一四八、僧四、山伏三)、馬二三疋で、酒屋は名主湯山家(下湯山)のほかに小酒屋が一軒あり、職人は桶屋、大工、木挽き、箕作り各一軒であった。

御宿村は、近世前期には村の東側に水田が広がり、西側は畑地が点在していた。元来水の乏しい土地であった御宿に水田ができたのは、御宿古堰が築造されてからのことで、用水は堰から取水されたあと、いったん西へ向かい、歌窪(うたくぼ)から南下して水田に水を送った。この水田の名請け人は、湯山家や中川家などの在地土豪であった。これに対し、西側の畑地を開発したのはおもに他の草分け百姓たちで、屋敷の周辺を自分たちの力で開発していった。

さらにその後、深良用水の開通で、遅れていた西側の大部分を一挙に水田化した。一六〇四(慶長九)年当

時の村高は一七六石余であったのが、深良用水開通後の一六七四(延宝二)年の検地では三七二石余と二百石も増えている。こうしたことから分家したり、独立したりして経済力をつけた百姓は、街道筋に出て屋敷を構えるようになり、集落を形成していった。

歴代の名主と湯山三家　一七九七(寛政九)年の明細帳には、毎年惣百姓から手間を二人ずつ出して、湯山家の田植え、麦刈りを手伝うとある。湯山家は近世の御宿村において大きな力を有していたのである。

一方、一七世紀の御宿村では名主の家柄を巡る争論がたびたび起きていた。宮内左衛門は一六四八(正保五)年、村人四名から隠田などの理由で訴えられ、籠舎となったが、二年後に周辺の有力者の預かりで許され、以後勘定割を自家で行わないことを約束して許された(『市史』三-二二一、二三号)。また、これ以前にも、海野久蔵という名主が追放されたこともあった。一方、湯山家は、近世初頭からの名主家であったが、元和期以後三家に分立した。近世初頭の御宿村の名主は湯山家先祖の湯山右近と海野久蔵であったが、久蔵が「悪事」のため追放された後は、右近の義兄弟にあたる宮内左衛門が久蔵の跡役となった。一六一一(慶長十六)年に右近急死ののち、宮内左衛門は右近家の田畑等を引き継ぎ、その五年後、宮内左衛門の三人の息子のうち、総領には宮内左衛門家の名主職を、右近家の養子となっていた次左衛門に右近家の名主職を、さらに半右衛門には神職を相続させて、湯山三家が成立した(『市史』三-二九七号)。これにより、宮内左衛門家は上湯山、神職の半右衛門家が中湯山、次左衛門家は下湯山と通称されるようになった。一六八八(元禄元)年に幕領代官小長谷勘左衛門が、元締めたちから深良用水の利権を取り上げて、地元に水配人を置いた際には、幕領側の代表として湯山平次郎が任命されている。

湯山家の日記に見る御宿の生活　下湯山家には近世前・中期(宝永五・七年・正徳二・三・五年・享保

十三年）の日記が残されている。これらは当時の農民の生活や社会意識が具体的に記されていて興味深い。とりわけ、一七〇八（宝永五）年の日記には駿河・伊豆両国横道三十三か所の順礼の記事が多く見られ、その行程が具体的にわかる史料となっている。このほか、伊勢参宮や愛鷹御師の来村といった信仰や、操人形（人形浄瑠璃）、勧進相撲、恵比寿講などの娯楽についての記事も見られる。操人形は岩波村へ見に行った記事があり、相撲は深良村や長久保村（長泉町）で開かれたことがわかる。一七一〇（宝永七）年の記事によれば、六月一日は「村中遊日」で百万遍念仏が行われ、七月二十八日には風祭が行われていたことがわかる。

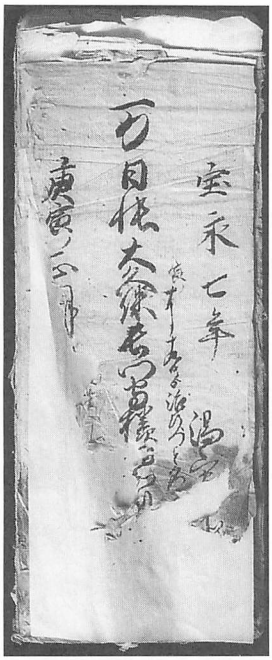


写真3－102
湯山安右衛門日記
（1710年　湯山芳健氏所蔵）

湯山家の女性たち

一七〇八（宝永五）年の安右衛門の日記には、村の女性の信仰習俗ともなった横道順礼について、母親の駿河伊豆両国横道の旅の記録が残されている。それによれば、御宿村七名、葛山村一名、千福村二名の計一〇名での旅で、内訳は母親四名、女房二名、男子四名となっている。母親は、七泊八日の順礼に「身誉理報」「締誉聴夏」の二つの法名らしきものを記した納札を用意していて、死者の霊を弔う目的をうかがわせる。

一方、一八四五（弘化二）年、湯山式右衛門の母は善光寺参詣に出ている。旅立ちにあたり二二人から餞別をもらい、二九人に善光寺さんの「南無阿弥陀仏」の名号壱幅を土産に買ってきたほか、召仕にも手ぬぐいを土産にしている。これらの土産と引き換えに、搗餅、打蕎麦、赤飯の「重之内」が無事の帰宅を

祝って届けられていた。

このほか、一七三三(享保十八)年の下湯山家の下女つたの家普請の記録からは、三七名もの村人の建築資材の援助と五人の人足によって家を建てたことがわかる。

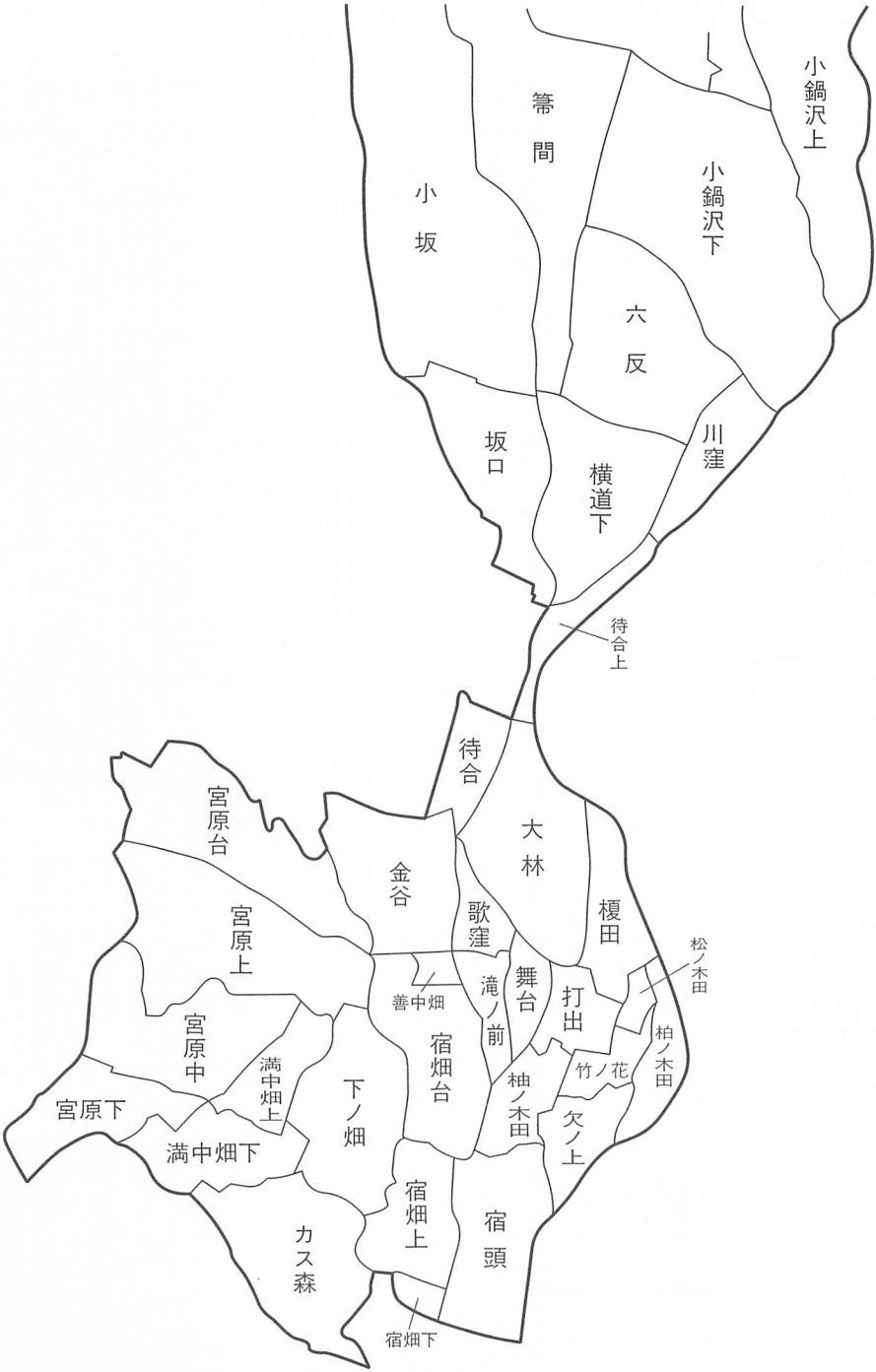
上湯山の家付き娘の湯山いゑは記憶をたどりながら、一八五二(嘉永五)年から一八八七(明治二十)年ころまでの村や家の出来事をメモしている。また、湯山半七郎の後妻として小田原藩士中垣家から嫁いだ勢以は一八六一(文久元)年に「かんてまかないでう」(勝手賄帳)をまとめている。ここには家の年中行事、折り目ごとの献立、神仏へのお供えなどがまとめられている。上層の家では、女性たちでも物を書き記すことが普通に行われていたのである。

飢饉・台風

天候不順によって全国的に広がった天保の飢饉は御宿村をも襲っている。この時期、荻野山中藩だった御宿村では、湯山半七が一八三六(天保七)年に施金・施米を行った。施金は金二朱(一両の八分一)または銭六百文、施米は大部分が五升で、ほかに一升から四升などさまざまだった。五四名が、あわせて金一両と銭六〇〇文、米二石二斗三升に麦三斗の施しを受けている。御宿村の家数は一八三九(天保十)年に七〇軒なので、八割近くの家が施しを受けた計算となる。

さらに、一八五四(安政元)年の地震の傷もまだ癒えない五六(安政三)年八月二十五日には、東海から関東を強烈な台風が襲っている。この年の九月に作成された御宿村の「八月二十五日夜風荒破損書上帳」によると、七〇軒ほどだった御宿村でも、居宅皆潰れ七軒・半潰れ一〇軒、隠居屋皆潰れ二軒、門・灰屋・物置などの被害九軒、合計二八軒と、半数近くの家が被害を受けている。このほか、天王宮・八幡宮の森の木一二本が吹き倒されてしまった。

図表3－95　御宿の字


小鍋沢上
小鍋沢下
筆間
小坂
六反
坂口
横道下
川窪
待合上
待合
大林
宮原台
金谷
歌窪
榎田
宮原上
松ノ木田
善中畑
滝ノ前
舞台
打出
宮原中
宿畑台
柏ノ木田
竹ノ花
満中畑上
下ノ畑
柚ノ木田
宮原下
欠ノ上
満中畑下
宿畑上
宿頭
カス森
宿畑下

図表3－96　御宿の字一覧

歌窪(ウタクボ)
打出(ウチデ)
榎田(エノキダ)
大林(オオバヤシ)
欠ノ上(カケノウエ)
柏ノ木田(カシワノキダ)
カス森(カスモリ)
金谷(カナヤ)
上アライ(カミアライ)
川窪(カワクボ)
小嵐(コアラシ)
小坂(コサカ)
小鍋沢上(コナベサワカミ)
小鍋沢下(コナベサワシモ)
坂口(サカグチ)
下ノ畑(シモノハタ)
宿頭(シュクガシラ)
宿畑上(シュクハタカミ)
宿畑下(シュクハタシモ)
宿畑台(シュクハタダイ)
善中畑(ゼンチュウバタ)
滝ノ前(タキノマエ)
竹ノ花(タケノハナ)
舞台(ブタイ)
平六沢(ヘイロクザワ)
箒間(ホウキマ)
朴ノ木平(ホウノキダイラ)
待合(マチアイ)
待合上(マチアイウエ)
松ノ木田(マツノキダ)
満中畑上(マンチュウバタウエ)
満中畑下(マンチュウバタシモ)
宮原上(ミヤバラウエ)
宮原下(ミヤバラシタ)
宮原台(ミヤバラダイ)
宮原中(ミヤバラナカ)
柚ノ木田(ユズノキダ)
横道下(ヨコミチシタ)
六反(ロクタン)

小田原藩領と沼津代官領の村々の入会争論

かつて、山は燃料の供給地として重要な役目を果たしていた。山の利用に関しての権利は、たびたび争論のもととなり、村々の対立を生み出してきたが、近世の御宿村でも山に関する争いが長い間続いていた。

一七世紀半ば、御宿村内の山について、もともと御宿村が独占的利用権を持ち、原則的には他村の入会は認められていなかったという御宿村の主張に対して、小田原藩領と沼津代官領の村々に争論が起こった。この結果この土地が小田原藩領の今里(いまざと)村、下和田(しもわだ)村の地内と確認されて、小田原藩領の下郷の村々に入会権が認められてしまう。一方、以後独占的な利用権を奪われてしまった御宿村は、小田原藩にたいして権利を主張し、これをきっかけに一六五四(承応三)年ごろから小田原藩領と沼津代官領の村々の対立が本格化していった。

両者の対立は争論にまでおよぶこととなったが、結局、一四三年後の一七九七(寛政九)年の段階においても、御宿村、上ケ田村、金沢村、葛山村はこの山に入れない状態は続くことになってしまった。このため、燃料の不足した御宿村、上ケ田村、金沢村の三か村が、今度は葛山村内の入会権に関して葛山村と対立するようになってしまったのである。ただこの問題に関しては、「葛山村之内山」を「御宿村・上ケ田村・金沢村・葛山村外三か村」が採草地として利用したことが一七九七(寛政九)年の「御宿村明細帳」に記されていて、最終的には入会は認められたようである。こうした争いは期間が長いため、村には代々争論関係の文書が大切に引き継がれている事が多い。

3　近現代

字

御宿における字は図表3-95・96のとおりである。

また、御宿の字や屋号の由来を、頼朝に仮託するものが多い。「歌窪」は、頼朝が和歌を残したところとされ、同じくウタクボというエーナ(家名＝屋号)を持つ家もある。「舞台」と呼ばれる字は頼朝が舞台に使ったと説明される。

行政区の変遷

明治の大区小区制では、第一大区三小区に属し、一八七八(明治十一)年の郡区町村編制法により、近世以来の御宿村に戻り民選の戸長が置かれた。それも一八八四(明治十七)年には戸長の官選と戸長役場の整理統合により、御宿は須山・下和田・今里・金沢・葛山・上ケ田・千福・大畑・定輪寺・富沢と一つに編制され、御宿に戸長役場が置かれた。一八八九(明治二十二)年に御宿は、下和田・今里・金沢・上ケ田・千福・大畑の九か村とともに富岡村となり、御宿はその大字となった。別に一村となった須山村とは、その後一一年間は組合村として関係が継続した。さらに、一九一〇(明治四十三)年、

富岡村のうち御宿、千福、上ヶ田の三大字が分離独立を決議し、一九一四(大正三)年に、静岡県に対して請願書を提出した。しかしこの願いは入れられなかった。戦後の一九五七(昭和三十二)年にすでに泉、小泉、深良が合併してできていた裾野町に須山村とともに合併、一九七一(昭和四十六)年に現在の裾野市となった。

戸数と人口

戸数と人口は、一八七五(明治八)年の「小区表編立調査」では、家持六五戸、借家二戸、社三座、寺一軒、人口は三五一人(男一六九人・女一八二人)となっている。一八八六(明治十九)年の「地誌取調草案」には本籍六九戸(内平民六八戸、士族一戸)、村社一座、無格社二座、寺一戸、総計七三戸とあり、人数は四〇三人(男二〇五人・女一九八人)とある。

また戦後の国勢調査による世帯数と人口の動向は、一九七五(昭和五十)年には一五九二世帯、六二八八人(男三四八五人・女二八〇三人)となっており、一〇〇年前に比べて人口は一七・九倍にもふくれあがっている。さらに二〇年後の一九九五年には、二五五〇世帯、六六一六人(男三六一八人・女二九九八人)となっている。

農業主体から商農兼業化へ

「小区表編立調査」の職分表では、人口三五一人中「農一八七人医師一人僧一人雑業二人」とある。さらに「地誌取調草案」では物産として、米、麦、茶、三椏・繭・製糸等として、さらに地勢の項目には「村ノ中央ハ人家ノ結構梢壮麗ニシテ、富商巨農アリ」と書かれている。田は三三町余り、畑は五九町、山林原野は二三〇町余りで、近世に比べて水田の増加が際立っている。

また商売を営むものも多く、一八八〇(明治十三)年「商業人取調」には二二人の商売と一年の売高が書き上げられている。ここには、小売、製造元、雑商などのほか、旅籠や飲食店、質屋、紙漉、水車、小間物、水車臼、半紙などの商売がみえる。一八七七(明治十)年の「農間荷車挽営業」、一八八〇(明治十三)年の質屋

の新規開業願いなどをみても、町場化した御宿において、明治期にはすでに農業を主体としながらも、かなりの兼業化が進んでいたといえよう。

御厨銀行の開業　一八七八(明治十一)年、御宿には、長栄講という頼母子講を発展させた環融社という銀行が設立された。中心となったのは豪農湯山半七郎で、資本金は一万円、株主には裾野地域を中心とする豪農、地主が名を連ねていた。これがのちの御厨銀行となったもので、その開業は一八八三(明治十六)年、本店は頭取となった湯山半七郎宅に置かれた。銀行の設立は、産業の振興を図ろうとした駿東地域の有力者によってなされたもので、資本金は六万円、貸付のほか、定期預かり・一時預かり・保護預かりなどの業務を行った。

嶽南小学校　一八七二(明治五)年の「学制」の頒布により、裾野地域は第二大学区第一四番中学区に区画された。御宿の湯山半七郎は、この翌年に明治政府によって神道国教化政策を進めるための教導職に任命され、さらに七五(明治八)年には、駿東地域での学校の設立や、就学の勧誘などの事務を担当する学区取締りとなった。以後、裾野の各地域に本格的に小学校が創立されるようになり、御宿は、上ケ田・金沢・葛山・千福とともに、荘園寺を仮校舎にした行餘舎を設立した。

その後、一八八〇(明治十三)年に上ケ田・金沢・御宿・葛山・千福・定輪寺・大畑・富沢の八村による行餘舎の新築が協議され、費用の都合上、湯山半七郎の所有地を借用して一八八二(明治十五)年十月に嶽南学校と改称して落成した。しかし、新築費用がさらに不足したため、初等科教室を売却して補うこととなり、上ケ田・金沢・葛山・千福にそれぞれ分校を設置した。この分校が廃止されて嶽南小学校として統合されたのは、一八八六(明治十九)年の学区統合の際のことで、この時にはさらに今里の今里舎と下和田の開昇舎それ

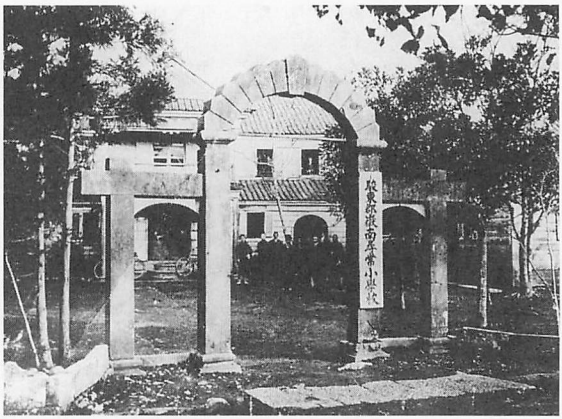


写真3－103　嶽南尋常小学校(1924年　勝又茂美氏所蔵)

に須山学校も統合され、新たに須山と下和田が嶽南小学校の分校となった。

嶽南小学校については、長らくその位置を巡って市域を二分する対立が続いた。一九〇八(明治四十一)年に尋常小学校は六年に延長され、分校となった下和田尋常小学校の生徒が残り二年間を南部の嶽南尋常小学校に通うことになったのがきっかけで、一九〇九(明治四十二)年に富岡の村会で小学校の移転が建議された。葛山・金沢・今里・下和田が北部移転派、御宿・上ケ田・千福・大畑・桃園(ももぞの)が南部非移転派であった。このときの対立は、移転はせずに、敷地の地代を南部の御宿・千福・上ケ田が負担して増築することで一応の決着を見るが、一九二五(大正十四)年、対立は再燃した。この年、駿東郡長が、今里、金沢と葛山の中里、田場沢(たばっさわ)が設立していた中里分校の廃止と、南よりにあった本校の位置を御宿の宮原に移転するよう指示した。このときも、御宿、千福、上ケ田などの南部の村民は移転に反対し、北部と激しく対立した。最終的に嶽南小学校は一九二九(昭和四)年に御宿内の若干北よりに移転改築され、長年にわたる対立に終止符を打つこととなった。

富岡第一小学校と富岡中学校　一九四一(昭和十六)年に、国民学校令によって嶽南小学校は富岡国民学校と改称されたが、一九四七(昭和二十二)年に富岡村立富岡小学校となる。また、同年には新制の富岡中学校も開校した。その後、下和田分校が富岡第二小学校となったため、校名を富岡第一小学校と改称して現在に至る。

第三節　地域社会と生活

農家戸数の変化　「農業センサス」は、農業集落を設定し統計をとったものであるが、これによれば農業集落は上谷・入谷・平山・新田の四つが設定されている。一九六〇(昭和三十五)年には、御宿全体の総戸数は一九一戸で、そのうち農業に従事する戸数は一一一戸と大半を占めていた。これが三〇年後の一九九〇年には、総戸数が一五〇四戸と激増したが、総農家数は七五戸と減って農業離れが顕著となった。

村内区分　御宿は坂上(もとは入谷のうち)・入谷・上谷・平山・新田の五つの最寄に分かれている。これらの最寄は現在は区とよばれていて、さらにその中には組が形成されている。この組の範囲を最寄と呼ぶこともある。組は戸数の増加に伴って増えていき、新しく開発された地域はさらに増えつつある。最寄はその時々の生活組織の範囲を示す呼称として用いられる。

御宿新田区は現在、下(した)・西(三組)・中(四組)・上(かみ)(二組)・北(六組)の計一六組から成っている。新田区の次に組が多くなっているのが坂上区である。区の内部は、東・中(二組)・西・北(二組)・南(五組)・宮原団地・ホラカシラハイツの一三組に分かれて区の運営に関わっている。ただし、ホラカシラハイツ組は現在、戸数が減少し外国人研修生が多くなったため坂上区の預かりとなっている。入谷区は上(うわ)・中・東・下・宮原

図表３－97　御宿の集落

新田
馬頭観音
御宿新田
コミュニティセンター
子ノ神社
カロウト堰
二間場堰
御宿新田公民館
道標
三光院跡
庚申塔
黄瀬川
古堰
庚申塔
旧墓地
馬頭観音
八幡宮
新柳端橋
柳端橋
上谷
上谷区公民館
御宿入谷区集会所
燈籠
富岡支所
御宿郵便局
新墓地
坂上区集会所
坂上
富岡中学校
山神社
富岡第一小学校
入谷
牛頭天王
旧墓地
宮原
駒形神社
景ケ島橋
元平山水源池
二尊堂
水神
秋葉・金比羅神社
荘園寺
平山区集会所
道標
野添橋
千福・町田線
生霊神社
宮川橋
県道富士・堀野線
東名高速道路
国道246号
上ケ田
前田
横手
上水道
千福取水場
千福城跡
100 200 300 400 500m

図表3－98　御宿の内部区分

最寄	区	組
坂上	御宿坂上	東
		中一・三
		西
		北一・二
		南一～五
		宮原団地
		ホラカシラハイツ
入谷	御宿入谷	上
		中
		東
		セジュール12
		下
		イソベハイツ
		宮原東
		宮原西
		宮原南
平山	御宿平山	上
		中
		下
上谷	御宿上谷	上
		中
		下
		南
		大林
		八幡町
		東上
		東下
新田	御宿新田	下
		西1～3
		中1～4
		上1・2
		北1A・B
		北2～5
	矢崎	
	トヨタ	
	関自工	

（東・西・南）・セジュール一二・イソベハイツの九組、上谷は上・中・下・南・東（上・下）・大林・八幡町の八組、平山は上・中・下の三組である。

御宿全体での氏神としては、八幡宮をまつっているが、このほか、平山最寄では秋葉神社、金比羅神社、水神をまつり、入谷と坂上は共同で山神社を、またこのうち宮原西組だけで天王さん（牛頭天王）を、さらに新田は子ノ神社を最寄の神様としてまつっている。

なお、一九六一（昭和三十六）年の矢崎部品の工場設立に始まった企業の進出により、トヨタ自動車、関東自動車工業などの社宅が増え、一九

七〇(昭和四十五)年に矢崎区、トヨタ区、翌七一年に関自工区などの区ができた。これらは、行政単位としては御宿であるが、自治会としては別である。

自治組織

御宿全体として役員は五つの区(最寄)から選ばれて、それぞれ区長、副区長、協議員三名の五人の役員が置かれている。協議員の三人は会計、厚生、建設を担当する。同様に、五つの最寄から各一名の相談役、村社である八幡宮の宮世話人が出ている。このほか、会計監査役二名、顧問一名の役員がおり、八幡宮の神社氏子総代は、今までは湯山三家となっていた。この八幡宮と地蔵尊の祭典当番区は五区が順番にあたっている。御宿のことを、五つの最寄(小区)と区別するために、大区ともいう。大区持ち回りの役員として、青少年補導員、交通指導員、防災指導員などがある。

一方、それぞれの区ごとにも区長、副区長がいてその下には協議員、さらに組ごとに組長が設置されている。組自体が上・中・下と三組の平山は協議員はおかず、組長だけで、上谷でも協議員としては二名でているだけだが、その他の区ではいくつかの組をまとめたブロックごとに協議員を出している。入谷では、上・中・東とセジュール12を合わせて一人の協議員を出し、下組から一名、宮原は東・西・南あわせて一名の協議員となっている。坂上では、東・中の二組で一名、西・北の組で一名、南の一・二組と宮原団地で一名、南の三・四・五組で一名のあわせて四名の協議員が、集会所と山車の運営員を兼務している。さらにこの四ブロックからそれぞれ山神社の世話人も各一名選出されている。新田でも、下・上・中・西から一名ずつと、戸数の多い北から二名の、あわせて六名の協議員が選出されている。このように、協議員の構成は最寄の範囲を受け継いでいるともいえる。そのことを示すように、入谷区では協議員を最寄総代ともいっている。

区の運営を担うこうした役員のほかに、裾野市とし

て共通の体育、自主防災、保健、子ども会、老人会などの役員が決められているが、さらに区独自の役員もいくつか設置されている。全小区に分収林委員や堰係、山神社をまつる入谷・坂上と、子神社をまつる新田はそれぞれの神社の総代や世話人を設置している。

写真3－104　御宿八幡宮の祭り

神社と寺

御宿全体の氏神は八幡宮で、五つの区からそれぞれ一名の宮世話人が出るほか、祭典にあたってはその年の当番区が中心となってこれを行う。一八八六(明治十九)年の「地誌取調草案」には祭礼日は八月十五日とあるが、現在は九月十五日となっている。八幡宮は「神社明細帳」に「祭神　譽田別命　由緒　慶長十二年九月創立明治八年十二月村社ニ列ス旧除地弐反五畝二九歩ヲ有セリ」とある。このほか境内社として、三峯神社、諏訪神社、御鍬社、稲荷社がある。

また、平山では最寄の神様として秋葉神社、金比羅神社をまつり、坂上と入谷では二つの最寄で山神社をまつっている。祭日は九月十六、十七日。それぞれ二名ずつの氏子総代のほか、世話人が坂上に四名、入谷に七名となっている。山神社は「神社明細帳」にも書き上げられており、一七一九(享保四)年創立とされる。

この「明細帳」には御宿にもう一社、子神社が書き上げられていて、一七〇〇(元禄十三)年十二月の創立とある。この子神社をまつる新田では六年に一回、六人の宮世話人を選出し、そのうち一名が当番世話人となる。宮世話人の六人がすべて当番を務めると改めて次の世話人を選出することになっている。昔は神輿があったという。祭礼は旧十月最初の子の日で、第二次大戦中に旧暦を新暦に改めて祭礼を行ったところ、赤痢が出たのでバチがあたったということになり、現在も旧暦で最初の子の日の前の土、日曜日に行っているという。上谷区だけでまつる神社はない。

また一族でまつる神社としては、入谷の西川イットウが本家で駒形神社をまつっている。水窪の長教寺の檀家で、武田の残党と伝えられる西川イットウは、もともと八戸で、景ケ島付近(宮原)に出て来て住みついたという。

寺は、浄土宗、京都知恩院末寺である光明山源広院(こうめいさんげんこういん)荘園寺が字宿畑にあり「寺院明細帳」には「天正八年二月宗祖円光大師法孫僧存秀創建ス」とある。本尊は阿弥陀如来で、境内に地蔵堂があり、この地蔵尊を御宿全体でまつっている。当番は五区が持ち回りで務め、

写真3-105　荘園寺での地蔵盆

七月二十三日に念仏講を呼んで行い、新盆の家が参加する。また、一九〇八(明治四十一)年、荘園寺で寄付を募り、長野から善光寺如来を勧請した。四月に祭りをしていたが、戦争のころに信仰は廃れるようになり、現在は地蔵尊の祭礼の日に善光寺さんも開帳しているという。この地蔵堂とは別に薬師をまつる薬師堂も街道(県道富士・裾野線)沿いにあり、毎月旧暦の十二日に、平山・入谷(坂上を含む)・上谷が合同で月並み念仏を行っていた。一九七九(昭和五十四)年二月にこの二つの堂をあわせた二尊堂が荘園寺境内に完成してからは、ここに薬師と地蔵をともにまつるようになった。

このほか、新田では日蓮さんをまつっている。日蓮さんは深良の小林由太郎家から個人的に受けてきたもので、一九二八(昭和三)年に倶楽部を建設する際、これに日蓮像を安置してまつるようになった。日蓮さんの祭日は旧一月十日と旧十月十日で、毎月十二日に題目をあげる。この日は、老人会の会合も兼ねていて、男性も出て、神社の清掃をしてから老人会を開く。昔は、おばあさんたちが各家を歩いて回り、野菜や米を集めた。この米でご飯を一斗くらい炊いてすし飯にし、楕円形の握り飯を作って新聞紙に包んで振る舞った。また、サバを焼いて骨や皮を取り、ご飯に炊き込んだすし飯も作ったものだった。

さまざまな講

かつては最寄ごとにさまざまな講が行われていた。新田では大山阿夫利神社ならびに秋葉さんへの代参講が行われた。神奈川県伊勢原市にある大山には二月の節分に、清水市の秋葉さんには十二月に代参し、お札を受けてきた。宿泊を伴う代参には二人一組で出かけ、そのための費用は最寄で積み立てていた。講金として集めた金を銀行に貯金して利子を得たほか、貸し付けてその利子を運用したりもした。新田では現在も、不動講を二〇戸で続けている。毎月二十七日に掛け軸を当番の家に回して行う。百姓のまつる神さんといい、昔は餅をつき、家

の若い衆が集まったものだった。

入谷でも、下組が二十七日に不動講を行っている。掛け軸をかけて、チャキチャキとやって拝む。ここの不動講は、組の常会を兼ねていて、区費を集め、ひと月のさまざまな議題を話し合う。かつては入谷区全体の一〇戸で、米を三合ずつ集めて行っていたが、次第に抜けて下組だけが残った。子どものまつる天神講は一月に行われ、淡島講は毎月十日(現在は都合のいい日)に、順番に宿を回してオンナシ(女衆)が子育て祈願のために集まった。入谷ではほかに山の神講、庚申講なども行われた。

新田では、八月十五日か十六日の盆踊りのあとの慰労会を蟹講という。黄瀬川に蟹がいたころ、この蟹を捕って蟹汁を作り、年寄りをねぎらったことからこの名がついた。盆踊りは老人会の女性が主体となって行う。蟹汁には蕎麦を入れてご馳走とするが、蕎麦はあっても蟹を買えず、蟹を入れるのをやめてしまったため、蟹講は蕎麦講に姿を変えた。夏祭りをするようになって、一五年ほど前から十一月に蕎麦講をするようになったという。

清水の倶利迦羅不動　御宿の石造物は、その多くが街道沿いに建てられている。つまり、石造物をたどると街道や旧道がわかるということである。とくに道祖神は、村の出入り口に建てられることが多く、新田の北端の深良・岩波境、平山の南端の千福境、入谷の東の葛山境付近などにある。街道には道標も建てられ、常夜塔を兼ねた道標には「左ふじみち　右甲州道」と記された一七五七(宝暦七)年のものがある。富士山参詣道と甲州街道との分岐を示している。ここは、かつて薬師堂があったところでもある。

また、順礼供養塔が多いのも御宿の特徴であろう。すでに述べたように、一八世紀初頭には駿河・伊豆両国横道三十三ケ所の順礼が行われており(「湯山安右衛門日記」)、その供養塔が建てられた経緯がうかがえる。

順礼供養塔は、御宿古堰近くの旧道(甲州道)沿いに七基あり、荘園寺墓地内にも三基ある。

御宿には、市域では珍しい石造物もいくつかある。一つは新田の子神社境内にある弁財天で、「大弁才天女」と彫られ、一八五二(嘉永五)年に巳待講中が造立している。庚申講や甲子講などはほかでも見受けられるが、巳待講はここにしかない。

今一つは、元平山水源にある岩肌に彫られた倶利迦羅不動である。水が貴重であった富岡地区では、御宿の清水といえば涸れることがない良質の湧水地であった。他の水神とともにまつられているが、同じ岩肌には「南無阿弥陀仏」の名号も刻まれており、ここが水源としてだけではなく宗教的な空間であったことも裏付けている。

写真3－106　岩に彫られた倶利迦羅不動

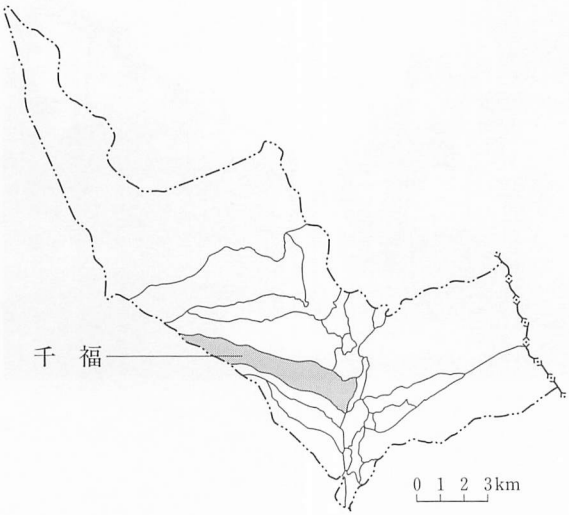
参考文献

『柏木甚右衛門覚書帳　湯山安右衛門日記』(叢書1)　裾野市史編さん委員会　一九九〇年

第二二章　千　福

第一節　地理的概要

図表3－99　千福の位置



自立した三最寄

千福のことを、地元ではセンブクと発音する。千福には、古くから谷津、細野、四ツ溝という三つの集落が展開してきた。これらの集落をモヨリ（最寄）といい、十二神社という氏神を核にして近世から一つの村を形成してきた。三つの最寄は立地条件が異なるため（後述）各最寄がそれぞれにまとまり、意識の上でも自立している。

位　置

千福は裾野市中心部から北西に位置し、愛鷹山位牌岳から東南に向かって派出する尾根の海抜一〇三二メートルの稜部を西端とし、東西約一キロメートル、東端の黄瀬川に面した南北約一・二六キロメートルを底辺とする狭長な三角形をした地区である。東は黄瀬川を隔てて石脇に対し、北は葛山、南は大畑と接する。愛鷹山位牌岳から東南に向かって派出する尾根の海抜一〇三二メートルの稜部を西端とし、この稜線で長泉町と接している。

写真3-107　千福が丘ニュータウン

地形と土地利用

黄瀬川と佐野川に狭まれた平坦部を除いては、ほとんどが愛鷹山地で、ほぼ全域がスギ・ヒノキの植林地である。この地域は佐野川（瀬名沢または宮川）の支流谷津川と、その北の細野沢が奥深く入り込んでいる。

海抜四八四メートル付近から二六〇メートル付近までの字小杉平、市場平に舌状の平坦地があり、開墾されて畑地となっていた。ここを東京急行電鉄株式会社（東急）が買収して、一九七六（昭和五十一）年千福ニュータウンという住宅団地とゴルフ場を建設し、景観が大きく変わった。

佐野川は北の葛山から流下して基盤の富士山の溶岩流を深く浸食し、屏風岩の景勝地を形成している。さらに千福のおよそ中央部をS字状に迂曲しながら、千福南端の松窪で黄瀬川に合流している。

東側の黄瀬川と佐野川に挟まれた平坦地は基盤は黄瀬川の河床をなしている富士溶岩であるが、その上部は黄瀬川の形成した河岸段丘で、佐野川に向かって僅かに傾斜している。この平坦地の北に平山という海抜二〇一メートルの丘陵があり、千福城（平山城）という中世城郭跡がある。この平山の裾部を北から久保川（平山川）が深く浸食し、東、南と迂曲して、佐野川へ合流して

いる。平坦地は水田地帯であったが、現在、東名高速道路、国道二四六号が通過し、工場用地、住宅地となって、大きく変化している。もとからの集落は、平山の東の根方道に沿って形成されている。

集落　千福は、富沢、大畑、葛山などと同じく、愛鷹山麓から黄瀬川に至る東西に細長い村域を有し、地形に制約を受けながら山裾部から河岸段丘にかけて集落が形成されてきた。

千福は古くから三つの集落が、谷筋、街道筋、河岸段丘の平坦地という三つの異なる条件でそれぞれに形成された。これらの集落は、集落を単位に最寄と呼ばれる社会組織をつくっている。谷津、細野、四ツ溝の三最寄である。

谷津川を底流として愛鷹山へ細長く入り込んでいる最寄は谷津である。谷津川沿いの一本道に沿って集落があり、下って根方道に入り、根方道沿いに屋敷が続いていく。道に沿って生け垣を造るところが多く、屋敷に畑地や果樹が隣接しているので緑の多い景観になっている。佐野川西岸と愛鷹山麓の間の平坦地を、根方道が葛山の方向へのぼる。その道沿いが細野である。根方道の両側の生け垣越しに屋敷が見え、昔の佇まいを残している。佐野川と黄瀬川に挟まれた平坦地が四ツ溝である。かつては水田地帯で普明寺周辺や県道富士・裾野線沿いに集落を形成していた。現在は国道二四六号が貫き、工場や会社が建ち並んでいる。

第二節　歴史概要

1　中世以前

千福ニュータウンで縄文遺跡発見　千福には一万年以上前から人が住んでいた形跡が残されている。一九七四(昭和四十九)年から一九七五(昭和五十)年にかけて、千福ニュータウン建設工事に伴い、この地区

の字市場平、小杉平、細野沢で遺跡が発見された。事前の発掘調査が実施された結果、市場平Ⅰ遺跡からは住居址などのほか縄文時代早期、前期・中期土器や、掻器(研磨具)、石鏃・石斧・石皿・磨石などの石器が出土した。市場平Ⅱ遺跡、小杉平Ⅰ遺跡、小杉平Ⅱ遺跡からは土坑、柱穴や縄文時代早期の土器や石皿などの石器が出土した。小杉平Ⅱ遺跡からは住居址も見つかっている。

細野沢遺跡では住居址や集石遺構のほか、縄文時代早期・前期・中期の土器と、有舌尖頭器(鏃)・打製石斧・石皿などの石器が出土した。土器の大半は前期後半のもので、県下では数の少ない特色のある遺跡である。

以後、古代までの歴史は資料がないので明らかでない。

馬場添遺跡

千福城の南約二六〇メートルのところにある馬場添(ばんばそえ)は、従来からこの城の馬場跡であるとされてきたところであった。一九八三(昭和五十八)年に国道二四六号が通過することになったため事前の発掘調査が実施された。この結果、竪穴遺構・溝状遺構・集石土坑・土坑・柱穴が検出され、遺構とその周辺から一六世紀の瀬戸の鉄釉(黒)・灰釉・緑釉の施された小皿・天目茶碗と擂鉢、中国産青磁片、中国産古銭等が出土し、遺物の年代や種類から見て千福城と関連のある遺跡と判断された。

千福城跡

千福城は、一九三五(昭和十)年、旧制県立静岡中学校教諭沼館愛三(ぬまだてあいぞう)が踏査し、在所の地名をとって千福城と名付けた。本城跡は先にふれたように千福字平山耕地にあり、字名から平山城とも呼ばれる。海抜二〇一メートルの独立丘陵を利用した山城で、北東から丘陵裾部をめぐる久保川(平山川)は深い浸食谷を形成して外濠の役割をはたし、北西は丘陵の鞍部で断ち切られている。平山全体が天然の要害となっている。

城郭の遺構は頂部の平場を主曲輪とし、東と南東方向に段状の曲輪を構成して、それに付属する裾曲輪と帯曲輪がある。東端の平場を馬場という。主曲輪の北西に深い空堀切が東西に振り分け状に掘られ、中央に狭い土橋があって、北西の出曲輪と連繋している。出曲輪の北西端は二重の空堀切で仕切られている。また南東の平山川の対岸には、空堀に囲まれた鍛冶屋敷と塩矢櫓がある。主曲輪南の裾部にある普明寺は城主の居館であったとされる。

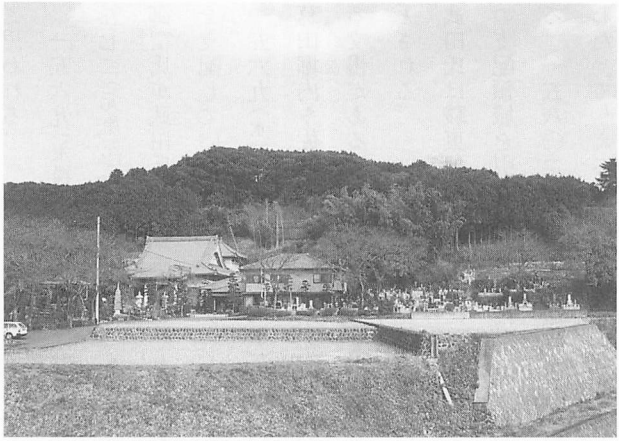


写真3－108　千福城跡

千福城の利用と千福の支配

千福城の利用を物語る史料はない。『駿河志料』の千福の条に「古館跡普明寺境内なり」といい、「御宿勘兵衛古城墟と云い、又一に葛山氏居なりとも云へり」と伝えている。また、『駿東郡誌』では普明寺は御宿友綱の居館であったという。御宿氏は、葛山の葛山城に本拠を置き室町、戦国時代に駿東一帯に勢力を持った葛山氏や大森氏の一族であった。

千福城は葛山城の南二キロメートルほどのところにある。ほかに葛山かくし砦伝承地(葛山)、手城山(金沢)、大畑城(大畑)などが葛山城から二、三キロメートルの範囲内にあり、葛山氏の軍事的拠点として有機的に結ばれていたもの

と思われる。

一五六九(永禄十二)年葛山氏が退転したのちは、一五七二(元亀三)年以降少なくとも天正年間中頃までは御宿氏が武田氏の一家臣として千福を含めた駿東一帯を支配していたと考えられる(『御殿場市史研究』Ⅲ)。一五六九(永禄十二)年北条氏が葛山氏の本領であった葛山堀内や佐野郷を重臣の子の清水新七郎に与えている文書がある。ただし、この文書は検討の余地があるとされる。一五七〇(元亀元)年武田軍が深沢城を破り、武田氏は駿東郡の大半を手に入れる。これ以降葛山氏の支配領域を引き継いだのは御宿の御宿監物友綱である。一五八〇(天正八)年に監物が、武田氏から数度にわたって与えられていた給地を子息若丸(綱貞)に譲渡している。そのうち千福は段銭共(年貢と反別の徴収銭を合わせて)一三九貫九四三文とある。

ところで、千福城の築城について、次のような文書がある。一六五〇(慶安三)年の「大畑村他五か村山林・古跡・用水等書上」の千福村の項で、「同村古城東西一八〇間、南北一二〇間あり、東・西・南の三方は川、北は空堀、大手の口は南空堀一重あり」とあり、小田原氏猶(北条氏直のこと)の家臣松田入道を取り立て築城したもので、七〇年前に普明寺の屋敷となったとある。この書上の七〇年前というと一五八〇(天正八)年である。また、先述の北条氏が葛山氏の本領を家臣に与えた文書の中で、「葛山郷除沢は敵(武田)に対する備えは必要ないと思うが、平山の外張(外壁、土塁、外堀)などについては、自ら適切な工事をせず出来ないという松田の言い訳は分別がなく(後略)」とあって、平山外張は千福城のことで、松田というのが松田入道とすれば、書上の文書の内容と対応しているということになる。この築城は、もともとあった城を建て直すか規模を拡大したということであろうか。

千福城は葛山城より規模が大きく、曲輪面積では四倍強もある。また、葛山城や大畑城が比較的山の頂部

にのみ曲輪を設けているのに対し、千福城は低い場所から山頂一帯に築かれている。

一五八二(天正十)年に武田氏滅亡後は、徳川氏の支配となり近世をむかえる。

2　近世

支配の変遷

支配は一六三二(寛永九)年以降幕領、一六八〇(延宝八)年から小田原藩領となるが、一六八三(天和三)年から幕領に復帰する。一六九八(元禄十一)年からは旗本内藤氏領となって幕末に至る。旗本の知行は幕府の方針で、元禄の世直しといい、これまでの俸給ではなく旗本に知行を与えて自分賄いをさせたのである。内藤氏の陣屋は当初富士郡原田(はらだ)村に置かれ、後に同郡の比奈(ひな)に移ったという。

村高と村の姿

一六五〇(慶安三)年(実際は慶安二年か)八月「駿東郡千福村田畑水帳」、一六七二(寛文十二)年六月「駿東郡千福村田畑検地御水帳」がある。村高は、正保郷帳三〇七石余、元禄郷帳四五七石余、天保郷帳四五八石余である。

一六九八(元禄十一)年の「千福村差出帳」によれば、村高一五五石のうち三分の二を米納、三分の一を金納している。内藤氏は財政窮乏していて租税を先納させたり月割りで徴収したため、村人はその年の米を抵当にして御殿場の日野屋より借金して納めたという。そのため千福には「内藤貧棒(ママ)金タタキ、一日タタキテ米一升」という童謡が生まれた(『駿東富岡村誌』)。

田の用水は「かろうと堰」から深良用水を取水しているが、かろうと堰は村々の寄合堰で、旗本松平氏の知行所となった上ケ田(あげた)、金沢、葛山、御宿と合わせて五か村で分けている。そのため、上流の四か村で水を取られてしまい、千福は日損場であることを訴えている。田方のうち、早稲米は少々であとは弥六という中稲である。畑方は、三分の二が大麦、三分の一が小麦とあるが、夏作として粟、稗、芋、大豆、ささげ、小

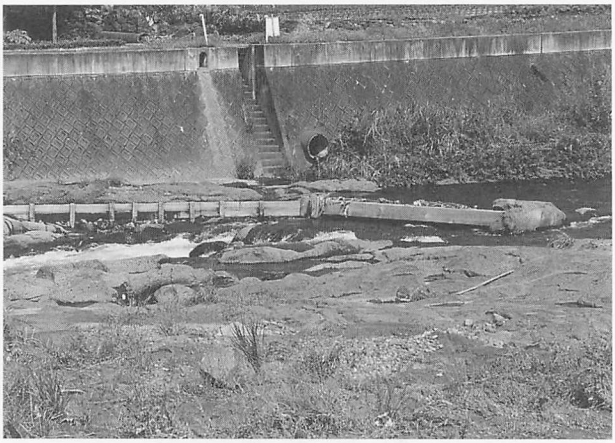


写真3－109　かろうと堰

てつくっている。村内の人数は不明だが、馬喰、家大工、鍛冶が各一人と桶屋が三人いる。

『駿河記』によると、曹洞宗の普明寺（朱印地一三石二斗余）と天台宗の天泉寺（除地三石四斗余）がある。氏神は十二所権現（十二社権現とも表記）である。他に富士浅間社・三島社・天神社・山王社がある。なお、先述の「千福村差出帳」では普明寺と十二所権現の除地一三石二斗余について、毎年八月に富士峰山伏が修行に来るためと説明している。

一七四二（寛保二）年の「御宿村・千福村村境定書」で千福村は御宿村と村境につき、葛山村名主の立ち会いのもと、清水坂口的場より往行までは水持を限ると協定している。また、境には両村とも竹木・立木を立てないことにしている。

愛鷹牧の牧士

愛鷹山は古くから山麓の数十か村が入会利用していたが、一七九七（寛政九）年に幕府が地元の反対を押し切って愛鷹牧（馬の

豆、茄子、陸稲をつくり、菜や大根や蕎麦など多様な畑作栽培も行われている。また、桑を持ち養蚕を行う者一四、五軒（自家用）、楮を持つ者一二、三軒、茶の木を持つ者一〇軒、たばこは分に応じて一畝、二畝あ

牧場)を設置した。千福の名主横山家は、定輪寺村の名主も兼ね、愛鷹牧の牧士を勤めている。牧士は幕府の御用であり、牧現地で管理、運営の中心になる重要な役で、扶持をもらって苗字帯刀を許されていた。愛鷹牧の牧士は当初五名だったが、文政期から一二名になり、このころから横山家の当主が歴代愛鷹牧との関係を維持している。市域では横山家だけである。

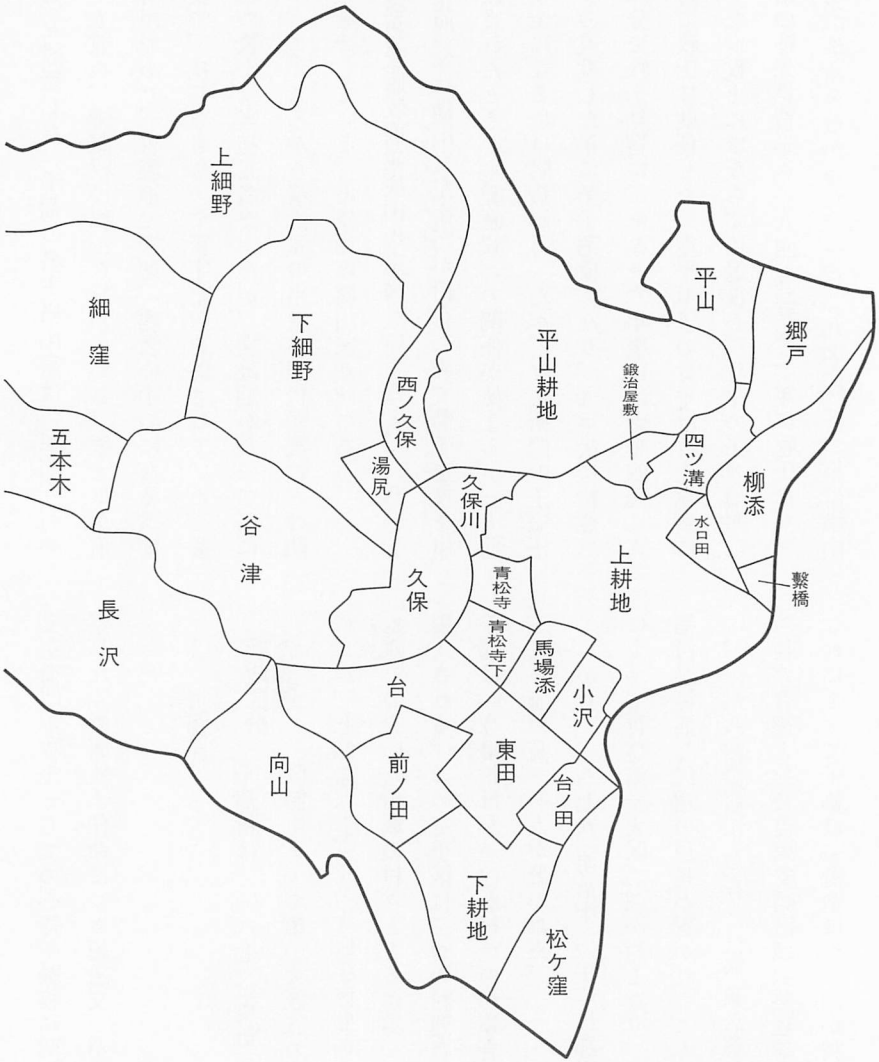
「駿州愛鷹牧取建横山氏系図」によると、一八〇七(文化四)年に横山文左衛門が給金二両で勢子廻役を申し渡されたときから愛鷹牧との関係が始まる。一人前の牧士になるには階級があったが、文左衛門の子瑞平は父の退役した年に勢子廻役になり、九年後に給金二両二分で牧士見習に、その一六年後には給金四両二人扶持で牧士に就任した。瑞平の子の林平は牧士見習になったが牧士にはならずに退役し、林平の子の瑞平は無給の野先見習から一八四九(嘉永二)年に牧士になって明治維新をむかえた。一八二九(文政一二)年に横山文左衛門が牧士としての心得や職務に関する起請文を写した「愛鷹牧士任命につき起請文」が残っている。

3　近現代

行政区分の変遷　千福村は、一八七二(明治五)年の大区小区制によって第一大区五の小区に編入されるが、七四(明治七)年の大区小区制の再編により、水窪をのぞいた市域の村々とともに第一大区三小区に編入される。この三小区は三つの村連合で構成され、千福は「今里村ほか一〇か村」の村連合に属し、戸長三人と副戸長一一人が置かれた。

しかし、一八七八(明治十一)年には郡区町村編制法によって再び第一大区二三か村となり、近世以来の千福村が復活し民選の戸長が置かれることになる。さらに、一八八四(明治十七)年には戸長公選制を廃止し、戸長の官選と戸長役場管轄区域の整理統合がなされた。これによって千福は「御宿ほか一〇か村」に組み入れ

図表3－100　千福の字


上細野
細窪
下細野
五本木
谷津
長沢
西ノ久保
湯尻
久保
久保川
平山耕地
鍛冶屋敷
平山
郷戸
四ツ溝
柳添
水口田
上耕地
繋橋
青松寺
青松寺下
馬場添
小沢
台
東田
台ノ田
向山
前ノ田
下耕地
松ケ窪

図表3－101　千福の字一覧

市野沢(イチノザワ)
市場平(イチバダイラ)
ウスンドウ(ウスンドウ)
姥子沢(ウバゴザワ)
追立(オツタテ)
鍛冶屋敷(カジヤシキ)
頭無(カシラナシ)
上耕地(カミゴウチ)
上細野(カミホソノ)
久保(クボ)
久保川(クボガワ)
郷戸(ゴウド)
小座釜(コザガマ)
小沢(コサワ)
小杉平(コスギダイラ)
五本木(ゴホンギ)
下耕地(シモゴウチ)
下細野(シモホソノ)
青松寺(セイショウジ)
青松寺下(セイショウジシタ)
台(ダイ)
台ノ田(ダイノタ)
繋橋(ツナギバシ)
長沢(ナガサワ)
西ノ久保(ニシノクボ)
馬場添(ババゾエ)
東田(ヒガシダ)
平山(ヒラヤマ)
平山耕地(ヒラヤマゴウチ)
佛立(ブツタテ)
細窪(ホソクボ)
細野沢(ホソノザワ)
仏ケ尾(ホトケガオ)
前ノ田(マエノタ)
松ケ窪(マツガクボ)
水口田(ミズグチダ)
向山(ムカイヤマ)
谷津(ヤト)
柳添(ヤナギゾエ)
湯尻(ユジリ)
四ツ溝(ヨツミゾ)

られ、戸長役場は御宿村に置かれた。

一八八八(明治二十一)年、町村制が公布され、翌八九(明治二十二)年四月に施行された。千福は、下和田村、今里村、金沢村、上ケ田村、御宿村、葛山村、大畑村、定輪寺村とともに富岡村に属した。富岡村は、須山村と町村組合を設け、須山村富岡村組合村となった。組合村役場は富岡村に置かれ、組合長も富岡村出身者が務めた。その後、一八九九(明治三十二)年に町村組合を解消し、富岡村は独立した行政村となった。

一九五二(昭和二十七)年に小泉村と泉村が合併して裾野町となり、さらに一九五六(昭和三十一)年には深良村が裾野町に合併する。富岡村は、一九五七(昭和三十二)年に須山村とともに裾野町に合併して裾野町になった。一九七一(昭和四十六)年に市制が施行され、現在の裾野市になった。

戸数と人口

一八七五(明治八)年の「小区表編立調査」によれば、人口は三五一人で、男が一六九人女が一八二人となっている。戸数は家持ち五八戸であった。一八八八(明治二十一)年の「御宿村ほか一〇か村、自治区造成に関する諸表」では人口四〇三人、戸数七二戸である。また一九二五年の「大正十四年度富岡村事務報告」では、人口七〇七人、戸数九三戸となっている。これ以外の大正時代や昭和初期は富岡村としての統計で、千福のみの数値はわからない。

生業の変遷

「小区表編立調査」の職分表では、人口三五一人中農業に従事する者が一八七人、僧一人、「雑業」二人のほかに「医術」が一人いる。一八八六(明治九)年の「御宿村外拾ヵ村地誌取調草案」では、田が三〇町八畝一四歩、畑が一七町六反四畝二四歩で、地味は黒色で稲によく、麦や桑や茶に適し、水の利もよいという。田は乾地だったので近世から二毛作をしていたという。

下って、大正初期の『駿東郡富岡村誌』では、養蚕が盛んな様子が記されている。また、一八九一(明治二十四)年ころに須山から竹行李の作り方を教わり、千福にも工場が四軒できた。一年に二四〇〇個ほどの割合でつくられるようになった。

入会地の官民有区分と払下げ

近世の千福を単位とした入会地は、明治以降も継承されていた。愛鷹山や大野原(おおのはら)などである。

愛鷹山の愛鷹牧は一八七五(明治八)年まで続き、地租改正によってその多くは官林に編入される。しかし入会地は生活や生業に欠かせないものであったため、民有引き戻しや払下げ運動が開始された。

愛鷹山入会地のうち、大畑・佐野・千福三か村入会地は一八八二(明治十五)年に民有地に編入された。それ以外の入会地については、当初千福は大畑、富沢、水窪や、原町(はらまち)、沼津(ぬまづ)町、長泉村、清水村など多くの町

村が組合をつくって運動をおこしたものには加わらず、千福だけで入会地に対して運動をした。その後一八九二(明治二十五)年に、御料地になった愛鷹山の官林の民有化をめざす組織に加入し、一八九二(明治二十五)年沼津町ほか一〇か町村組合が結成された。この組合の対象になる原野に千福は関係していなかったが、千福地籍の引戻対象地二八筆一二三町一反三畝一二歩(じっさいの計算値と若干齟齬あり)を加えて、ともに愛鷹山引戻運動を展開した。一八九九(明治三十二)年に組合に対して払下げが実現した。こうした愛鷹山の民有引戻、払下運動の経緯から払戻しが実現するまでを、運動の中心的な位置にあった千福の横山健吾(よこやまけんご)が記録した『代脳録』が残されている。沼津町ほか一〇か町村組合は一九四〇(昭和十五)年に愛鷹山組合と改称し、一九五〇(昭和二十五)年に解散した。解散時に千福地籍の払下げを受けた。

大野原入会地も払下げ運動が行われたが、一八八九(明治二十二)年に御料地に編入されてからはこれを断念し、入会地を借り受けることによって官有地入会の形をとり入会利用を継続することになった。大野原は一九一二(明治四十五)年に陸軍の富士裾野陸軍演習場となったが、従来どおり入会地として利用した。その後敗戦によってさまざまに事情が変わり、アメリカ軍の占領を経て自衛隊による演習場の使用が開始され、現在に至っている。

嶽南小学校

一八七二(明治五)年に学制が頒布され、千福は上ケ田、御宿、金沢、葛山とともに行餘舎(こうよしゃ)を設立している。その後御宿の荘園寺(しょうえんじ)を仮校舎にしていた行餘舎の校舎を新築することになり、行餘舎定輪寺支校を設置していた富沢、定輪寺、大畑を加えた八村の連合によって一八八二(明治十五)年に嶽南(がくなん)小学校と改名して落成した。しかし新築費用が集められず、新築なった初等科教室を売却して補うことになった。そのため千福には初等科のみの分校として

望扇閣を設置した。

その後分校を統合した嶽南小学校は嶽南尋常小学校となり、その後いく度かの制度的変更、名称変更を経て、現在の裾野市立富岡第一小学校となった（第二一章御宿参照）。

嶽南小学校の移転と分村問題　一八八六（明治十九）年に静岡県内の学区が大幅に統合された。嶽南小学校は、今里舎（今里）、開昇舎（下和田）、須山小学校を統合し、千福の望扇閣も葛山の分校とともに廃止された。同年の小学校令により、嶽南尋常小学校となった。

一九〇八（明治四十一）年、尋常小学校の義務教育年限が六年に延長されたことを契機に、富岡村内で北部の大字と南部の大字との間に対立が生じた。統合によって通学に不便を感じていた北部の人々が、小学校を富岡村中央部へ移転することを主張した。それに対して、千福は御宿、上ケ田、など南部の大字とともに移転に絶対反対の立場をとった。南部と北部の対立は、小学校問題にとどまらず村政にもおよび、分村問題にまで発展した。一九一〇（明治四十三）年と一九二四（大正十三）年の二度にわたって御宿、上ケ田、千福は富岡村から分離して一村を構成するという請願書を提出している。しかし、ようやく一九二八（昭和三）年に御宿の北よりに移転することで双方の合意を得、翌年嶽南小学校は移転改築された。

第三節　地域社会と生活

村内区分と区の役員　千福は現在千福区、千福が丘区、千福南区の三つの区に分かれている。このうち、千福が丘区は千福が丘ニュータウンを造成したことによって一九八三（昭和五十八）年に行政区となった。千福南区がもっとも近年で、一九八九年に五竜の滝付近にマンションが建設されて新しく行政区になっ

た。これらの区は大字千福だが、各々別個に自治会を組織している。

近世の村から続いている集落は千福区である。千福区は三つの最寄からなっている。最寄は伝統的な生活や生業の基盤となるが、さらに図表3－102のように一六組に分かれている。市域では戸数の増加に伴い、一組から番号が名称になっているところが多いが、千福区は沖（おき）、台（だい）、横手（よこて）、山道（やまみち）、川端（かわばた）、湯尻（ゆじり）など古くから使われていた固有の名称がついている。組内にその屋号（家名）を持つ家がある。

図表3－102　千福の内部区分

区	最寄	組・班
千福	四ツ溝	上
		中
		東
		西
		南
	細野	横手
		山道
		川端
		湯尻
	谷津	久保1・2
		台 1・2
		東
		中
		沖
千福南		なし
千福が丘		1～37

区の役職には、区長、副区長各一名、協議員三名、一六組の組長、宮世話人、部農会長各三名（各最寄より一名ずつ）、公民館推進委員長、防災会会長、体育委員長、振興会会長、千福老人クラブ会長、谷津老人クラブ会長、青年会会長、子供会会長、婦人部部長、町づくりセミナー委員、保健委員、民生委員、防災指導員などがある。

十二神社と普明寺　千福の氏神は十二神社である。十二所社ともいい、地元では「十二社さん」と呼んでいる。一八八三（明治十六年）の「神社明細調」によると、祭神は十二神で、「国常立尊・国狭土尊・豊受斟渟尊・泥土煮尊・沙煮尊・伊奘諾尊・伊奘冊尊・大日霎貴・天忍穂耳尊・瓊々杵尊・彦火々出見尊・鸕鷀草葺不合尊」をまつる。創建は寛永年間（一六二四～四三）で、一八八五（明治八）年に村社に列せられた。しかし、古老の口碑として、「寛永年中に村

図表3－103　千福の集落

民が修復した」と記される。さらに一八六一(文久元)年正月二日曙に火災があって本社も拝殿も焼失したものを、氏子らが財をなげうって同年中秋に神殿拝殿を造営した。故に創建年月は不明である。昔は天神七代地神五代合計十二神を崇敬し、十二神社を奉祀したとある。

十二神社の祭日は、「神社明細調」では「九月十二日、旧八月十二日」とある。一八五五(安政二)年の「富士山伏人馬順立覚帳」には、法印を八月十一日に三嶋大社に迎えに行き、十二神社で護摩祈禱を終えたあと、大畑に送る村迎え村送りの役にあたる人の名が記されている。富士山で夏峰の行を終えた法印が、十二神社の祭りに立ち寄り護摩祈禱をして火渡りをするのは、戦前まで続いていた。現在十二神社の祭日はひと月遅れの十月十二日で、その近くの休日に行われ、御輿が出る。当番は三つの最寄と宮世話人が輪番で行う。

千福では三つの最寄のほとんどの家が曹洞宗普明寺の檀家である。ほかに葛山の仙年寺の檀家が何軒かある。一八七九(明治十二)年の「寺院明細帳」によると、古くは真言宗で長楽寺と号したが、応仁年間(一四六六～七)に廃絶した。一四七一(文明三)年に再建され、曹洞宗に変わり、普明寺と改めたという。曹洞宗普明寺の開山は、桃園の定輪寺の二世安叟宗楞である。

さらに「地誌取調草案」では「武田氏より寺号を給って見性寺という」とある。見性寺と普明寺の関連を直接的に示す文書は見当たらないが、同じ寺であるとするならば、一五七二(元亀三)年の武田晴信判物や「報恩院前住帳」により、一五五五(弘治元)年から一五九〇(天正十八)年の間の名称であったといえる。

普明寺は一九二七(昭和二)年に火災に遭い、天保二年建立の本堂や庫裡など一切を失ったが、翌年から本堂を再建し、四年後には鐘楼も再建した。

近世には曹洞宗の清(青)松寺と天台宗の天泉寺、唯

写真3－110　再建がなった千福の地蔵堂
（有井定氏所蔵）

老人クラブ、仏教系の祭りは念仏講として世話をする。

地蔵堂は谷津にあり、地蔵さんと呼ばれている。地蔵堂には一八二二（文政五）年に本堂建立したという棟札がある。一九二九（昭和四）年の棟札には「蚕地蔵堂再建」と書かれている。現在の地蔵堂は一九九六年三月に再建された。祭日は七月二十三日で、子ども相撲が奉納される。

高尾さんは古くは山の上の方の細野と谷津の境にあって、双方の最寄でまつっていた。山が崩れたため、現在は公民館の敷地におろし、区全体でまつっている。祭日は十二月一日である。

天王さんは、一七八五（天明五）年創建の牛頭天王社が細野にあったので細野がまつっていたが、現在は公民館に牛頭天王像を移し、区全体でまつる。祭日は七月十五日である。

最寄単位でまつる神仏は、弘法さんと山の神さんである。弘法さんの祭日は二月二十一日で、公民館や地心庵などがあったが、いずれも廃寺になっている。

区でまつる神仏

千福全体でまつる神仏は、地蔵さん、天王さん、高尾さんである。これらの祭りは老人クラブ（念仏講）が交代で当番に当たる。老人クラブと念仏講はほぼ同じ成員だが、神をまつるときは

蔵堂で各最寄が別個にまつり、念仏をあげる。最寄ごとに弘法大師像を一体ずつ所有しているが、現在は三体いっしょに地蔵堂に安置している。祭日になると公民館で行う最寄は、自分たちの弘法大師像を公民館に運んでまつる。

細野ではかつては青年倶楽部に弘法大師像を安置し、そこでまつりをした。青年倶楽部がなくなってから地蔵堂に移すまでは、細野の共同膳椀を置く建物に安置し、広い家を借りてまつりをした。四ツ溝では近年まで弘法さんを当番の家に安置した。「山の神さんといっしょについて歩く」といって、山の神の当番の家で弘法さんのまつりをし、一年間その家の床の間でお守りした。

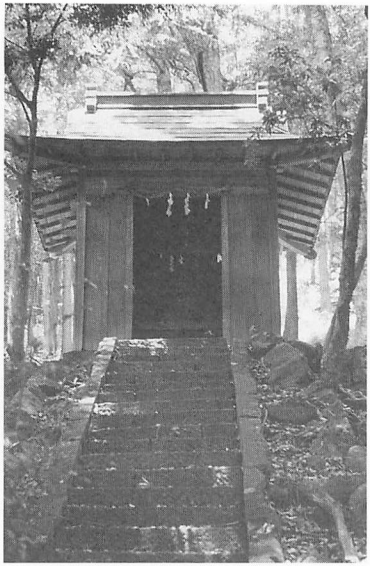


写真3－111　谷津の山の神

山の神さんの祭りを大きく行うのは谷津である。谷津の山の神は十二神社の上方にある。祭日は一月十七日である。沖、中、東、久保、台の組で年順に当番になり、おこわを蒸かし、山の神さんへおこわや御神酒を持って行ってまつりをする。谷津の人々がお参りしておこわの握り飯をもらう。もとは当番の家へ行ってお振る舞いをしたが、現在は公民館で行う。谷津では「一番大きな祭りは山の神さん」という意識がある。細野と四ツ溝の山の神は千福大橋の上方にある。現在でも細野の当番が山の神さんにいってまつりをするが、お参りする人はほとんどいなくなった。昔は山の神さんで焚き火をしておこわを蒸かして参詣の人に分けた。細野では現在お振る舞いはせず、新年会を行う。

写真3－112　四ツ溝の石塔群

多様な形態の道祖神

千福には道祖神（サイノカミ）や庚申塔が多い。これらはかつて千福村の出入口付近と、各最寄の出入口に建てられている。細野では、集落の中心部に石造物が並んでいて、そこに道祖神も庚申塔もある。千福では男女双体道祖神が多いが、丸石、文字塔、自然石などさまざまな形態が見られる。男女双体像は、黄瀬川西岸では千福から北に多く見られる。

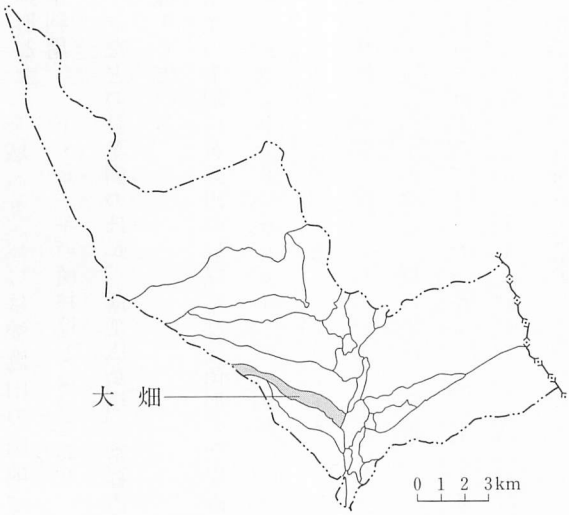
天泉寺跡には順礼供養塔が建てられている。ここは東から千福に入る入口に当たる。一六八五（貞享二）年の造立で、市内で三番目に古い順礼供養塔である。

馬頭観音像も多く建てられている。西川橋のたもとの馬頭観音像が建てられている場所は、細野の人々がサイトヤキをし、盆の送りもするところでもある。

第二三章　大　畑

第一節　地理的概要

図表3－104　大畑の位置



中世を残す小字　大畑は近世から近代に至るまで戸数一〇軒前後の小さな集落である。しかし、中世には大畑城や居館、侍屋敷などが整い、中央につながる寺院もあり、また小鍛冶場も備えて、中世を通じて人々の重要な拠点であったと思われる地である。現在も、殿屋敷・上屋敷・中屋敷・下屋敷・牢屋敷などの字が残り、当時の様子が偲ばれる。

位　置　大畑は裾野市の中心部からみて西北に位置している。愛鷹山位牌岳より南東へ派出した尾根の海抜五七五メートルの頂部を西端とし、それより南東へ約五・五キロメートル、南北の幅約五〇〇メートルの細長い地区で、東端は黄瀬川を隔てて佐野と対している。北は千福、南は桃園（旧定輪寺）、北西は愛鷹山尾根の稜線で長泉町と接している。

地形と土地利用

全域の九〇パーセントは愛鷹山の山地で、スギ・ヒノキの植林地となっており、一部はマツなどの針葉樹のほか、落葉広葉樹、常緑広葉樹が混生している。

山麓の末端に黄瀬川の形成した三角形の河岸段丘があり、西側に勝負川の渓流があって、山麓と分離されている。北側は愛鷹山尾根の末端で遮られ、その北側山脚は佐野川で深く区切られていて、千福に対している。この段丘の平坦地が大畑の集落と畑地となっており、段丘の西北側に小さな谷があって、若干の水田が開かれている。段丘の東下は根岸という黄瀬川の形成した氾濫原で、山麓から流れ出た勝負川の水を利用して水田となっている。現在、集落の西側は東名高速道路と国道二四六号が通過し、景観が大きく変貌している。

集落の姿

愛鷹山と黄瀬川に挟まれた河岸段丘上の北寄りに大畑の集落が形成されている。北端に大畑城跡があり、その麓に熊野神社、大日堂、弘法大師堂、山の神がかたまって建てられている。区の集会所・老人憩いの家もこのそばにある。熊野神社からまっすぐに南に向かう道を軸として、神社に近いところに家々が集まっている。

大畑と佐野を結ぶ大畑橋から集落に入る道は、集落内で鍵の手に曲がり、熊野神社に向かった後、入谷部から愛鷹山へ続いている。根方街道は集落に入らずに黄瀬川沿いを通っている。

愛鷹山に入り込む谷の入り口に駿東地区教育会館がある。その奥に裾野市美化センターがある。

黄瀬川べりの大畑一番地には、深良用水を取り込む穴堰がある。

第二節　歴史概要

1　中世以前

入れ墨のある土偶　大畑の熊野神社には、愛鷹山麓から発見されたという縄文時代中期の土偶が伝えられている。土偶は頭部のみで、深く刻まれた線で顔面に文様があり、入れ墨とされている。隣接する桃園と同じく、愛鷹山麓には縄文時代遺跡があったものと考えられている。

大畑城跡　集落を北側で遮る丘陵は古城跡といい、海抜一七六メートルの頂部を中心に中世の山城跡がある、北と東は深い佐野川の渓流と黄瀬川で画され、天然の要害となっている。

大畑城跡は熊野神社のすぐ北側の丘陵頂部を削平して主郭とし、一段下の東西に袖郭をつくり、南側に両袖郭を結ぶ通路状の郭を設けて主曲輪を構成している。主曲輪の東西は深い空堀切で遮断している。主郭の北西隅下には井戸址がある。東空堀切から東は狭い尾根筋で数段の平場があり、南東に迂曲して下降し先端は

写真3－113　大畑城跡

段丘面となるが、ここに黄瀬川に落ち込む堅堀と、反対の西側には空堀と土塁がのこされている。主曲輪の東側と東曲輪の南側下方に広がっている方一〇〇メートルの平坦地を殿屋敷といい、北西隅と南側中央部に土塁が残存している。西空堀の西側尾根稜部は、海抜二七三メートルの頂部を中心に平場があり、その西端の方形の見張り台と西側直下に空堀があって西曲輪が構成されていたが、西端の見張台以西は東名高速道路によって切り取られ消滅してしまった。

大畑城と集落

大畑城の北約一キロメートル弱のところに千福城が存在し、そこからさらに北西方向に二キロメートルほどのところに葛山城（かずらやま）があった。葛山城は、室町、戦国時代に駿東一帯に勢力を持った葛山氏が本拠を置いた山城である。大畑城は、千福城や葛山かくし砦伝承地（葛山）や手城山（てしろやま）（金沢（かねざわ））などとともに、葛山氏の軍事的拠点として有機的に結ばれていたと考えられる。なお、『駿河志料』には、大畑城は甲州方の杉山兵太郎が守ったとある。

城の南側には「殿屋敷」に隣接して、方一〇〇メートル余りの「上屋敷」「中屋敷」「下屋敷」といった字が連なり、熊野神社や大日堂が存在して、城と居館が一体となっていた様子が分かる。

一九八四（昭和五十九）年、国道二四六号が大畑城跡西曲輪と、その南側直下の上屋敷・中屋敷の一部を通過することになったため、事前の発掘調査が実施された。上屋敷からは、土師器甕を伴った竪穴住居址が二軒検出され、出土品や土師器の年代から、一一世紀に鍛冶、銅製品の鋳造などを目的とした工房が営まれていたことが判明した。

さらに二棟の大形掘立柱建物址、これを囲む溝状遺構、建物址と重複する二六基の鍛冶址（火床址）、焼土址、木炭の散布、土坑、柱穴、方形大形集石墓が検出された。これらの遺構に伴って、中国産の白磁、青白磁、青磁の皿や、常滑・渥美・瀬戸産の大形甕・鉢・

片口鉢・皿・碗などの陶器類、多量のかわらけ（素焼坏）・布目瓦などの土製品、大小の刀子・大小の釘類・くさび・鋏（かすがい）・特殊刃物、中国古銭などの金属製品と鉄膚、また中国産石綿で作られた温石（懐炉）などが出土した。

写真3－114　大畑遺跡上屋敷地区中世墓

大形の建物址と鍛冶址は重複しているが、その柱穴は重複していないことと、建物址内に鍛冶に用いたと考えられる多量の木炭片が散することから推して、大形建物址が本来持っていた機能が失われた時点で、鍛冶の操業に利用されたものと考えられる。二六基の鍛冶址は重複しているものや接近しているものもあることから、同時操業ではなく数次に渉って操業が繰り返されていたこと、また鉄滓や鉄膚の有無といった個々の特徴から、鍛造、素延、鍛接、焼入などの分業形態があったと考えられている。出土の陶器類の年代から、掘立柱建物の使用と鍛冶の操業は一二世紀から一三世紀後半まで行われ、この終わり頃に集石墓が造営されたものと考えられている。集石墓は二・七五メートルの方形大形墓で、墓の規模や手の込んだ造りから、被葬者は社会的に地位の高い人物であったと考えられる。その他、中屋敷、殿屋敷でも、屋敷を区切る溝状遺構や土

坑などが検出されている。

熊野神社西側上方には経文を埋納した経塚があり、埋納用の大甕底部と経文を納めた陶製の経筒一個が発見されている。大甕は一二～一三世紀前半の常滑産のもの、経筒は一二世紀後半の渥美産のもので、この頃に経塚が造営されたことが判明した。

このように、小鍛冶場を伴う大きな建物があったり、経筒を納めた経塚があることなど、大畑は中世を通じて人々の重要な活動の拠点であったと思われる。

大畑は中世末には今川、武田、徳川と支配が移り変わって近世をむかえる。

『閑谷集』に見る大畑　鎌倉時代の私家集『閑谷集』の作者は足柄路を通っていて、一一八五(文治元)年ころから一二〇四(元久元)年ころまで大畑に草庵を営んだ。そこから大岡荘内をめぐり歩いて和歌を詠んでいる。この『閑谷集』からそのころの大畑の様子を知ることができる。大畑に住み始めたころには、「大畑にいれば栗が多くあるだろうから、すこしよこせ」といわれている。また、一二〇二(建仁二)年には、大畑の人々が集まって庚申待が行われて夜を明かしていたとあり、このときは「七庚申ある」として、正月十四日、三月十五日、七月十八日、九月十九日、閏十月十九日、十二月二十日の七夜集まったという。その二年後の記述には、十二月二十五日に「大畑の愛鷹のお祭り」が行われたという(『新編国歌大観』七－六九)。

大幡寺・大円寺・伴東寺　一三七三(応安六)年の細川頼之奉書に、大岡荘大幡寺が出てくるが、語音などから大畑にあったかと思われる。一三七三(応安六)年に鎌倉の鶴岡八幡宮寺密乗坊の僧頼印に、一四一四(応永二十一)年に京都の醍醐寺の僧持円に、大岡荘内の牧御堂・岡宮浅間宮とともに大幡寺別当職(大寺などの寺務総括する職)が与えられている。

一五七六(天正四)年に、『今川家譜』が「葛山ノ近

所ノ大円寺ノ薬師堂」で書かれた(「市史」二-八二一号)。大円寺の所在地は確認できていない。大幡寺ではないかと思われているが定かではない。現在の大日堂の大日如来座像は大幡寺の本尊だったが、地元では、大幡寺が兵火で焼失したときに運び出して大日堂に移したと伝えられている。

『駿河記』『駿河志料』ともに、大畑にはかつて伴東寺が存在したと記されている。『駿河志料』の大畑「大日堂」の項には、伴東寺という精舎があって七堂伽藍を備えていたが、兵火によって炎上し、大日如来座像のみが焼け残った。さらに天保年間にも焼失したが仏像は火災をまぬがれたと記されている。

この伴東寺と大幡寺、大円寺の関係が分かれば、大畑についても新たな事実が浮かび上がってくるかもしれない。

2　近世

支配の変遷

大畑村の支配は、一六三二(寛永九)年以降幕領、一六八〇(延宝八)年から小田原藩領になり、一六八三(天和三)年いったん幕領に戻る。一七七八(安永七)年それ以降幕領となり、一八五二(嘉永五)年から旗本駒木根氏の領地となって幕末に至る。

旗本の領地となってからの大畑村は、駒木根氏が裕福であることと村の面積が広かったことによって、経済的に豊かだったという。領主と村民の関係は非常に円滑で、たとえば名主が駒木根氏に年頭の参殿をすると、優待されて十数日間も引き留められ、いろいろなところを見物させてくれたという(『駿東郡富岡村誌』)。

村高と村の姿

一六七二(寛文十二)年八月の「駿州駿東郡大畑村検地水帳」がある。村高は、正保郷帳四六石二升、元禄郷帳四六石三升三合、

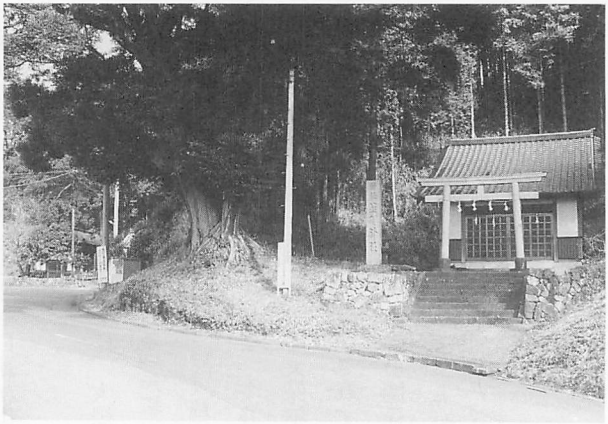


写真3-115　熊野神社と大日堂

天保郷帳四六石七斗五升六合三夕、旧高旧領取調では四六石七斗五升六合である。

戸口は一七七六(安永五)年の「大畑村戸口等書上」によると、家数一三軒、五三人、男二六・女二七、馬三疋とある。このとき大畑村は、富沢村の名主嘉六が兼帯名主を勤めている。

全戸が千福村普明寺の檀家で、熊野神社(除地一石余)や大日堂がある。近世以来全戸でタバコを栽培し、「大畑タバコ」と称して周辺に売り出していた。大畑村の有志の者は佐野村の蓮光寺に行って教育を受けていたという(『駿東郡富岡村誌』)。なお、大畑には「富沢穴」(『駿河記』・穴堰のこと)という黄瀬川からの深良用水の取水口があり、「富沢・定輪寺・一色の用水」とされていたが、大畑村では使っていない。

干ばつと竹の実結　大畑村は、一七七一(明和八)年に干ばつのため「年貢用捨願」を出している。この村は深良用水の恩恵を受けることができず、愛鷹山の沢水に頼るしかなかったので、干ばつには苦労したと思われる。

また、一八一三(文化十)年には、竹の実が結んだために竹が残らず枯れてしまったことを韮山役所に報告

している。小竹を沼津に出していた村民にとっては大問題であった。

3　近現代

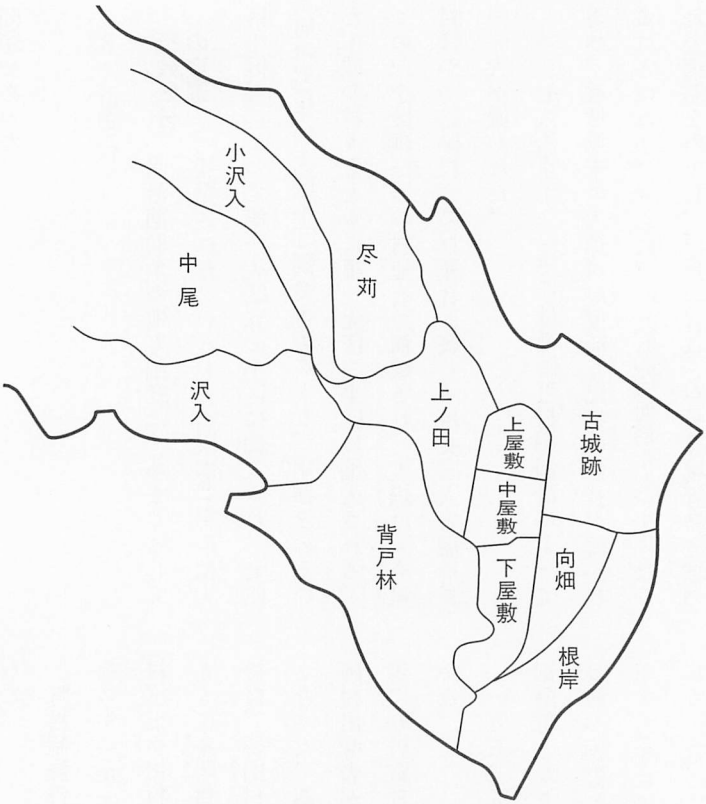
行政区分の変遷　明治期前半の地方制度は、めまぐるしく変更された。一八七二(明治五)年には大区小区制によって第一大区五の小区に編入され、七四(明治七)年の大区小区制の再編により、水窪をのぞいた市域の村々とともに第一大区三小区に編入される。この三小区は三つの村連合で構成され、大畑は「今里村ほか一〇か村」の村連合に属し、戸長三人と副戸長一一人が置かれた。

一八七八(明治十一)年には郡区町村編制法によって再び、近世以来の大畑村が復活し民選の戸長が置かれることになる。さらに、一八八四(明治十七)年には戸長公選制を廃止し、戸長の官選と戸長役場管轄区域の整理統合がなされた。これによって大畑は「御宿ほか一〇か村」に組み入れられ、戸長役場は御宿村に置かれた。

町村制施行に伴う大規模な町村合併で一八八九(明治二十二)年四月に大畑は、下和田村、今里村、金沢村、上ケ田村、御宿村、葛山村、千福村、定輪寺村とともに富岡村になり、大畑はその大字となった。富岡村は、須山村と町村組合を設け、須山村富岡村組合村となった。組合村役場は富岡村に置かれ、組合長も富岡村出身者が務めた。その後、一八九九(明治三十二)年に町村組合を解消し、富岡村は独立した行政村となった。

一九五二(昭和二十七)年に小泉村と泉村が合併して裾野町となり、さらに一九五六(昭和三十一)年には深良村が裾野町に合併する。富岡村は、一九五七(昭和三十二)年に須山村とともに裾野町に合併して裾野町になった。一九七一(昭和四十六)年に市制が施行され、現在の裾野市になった。

図表3－105　大畑の字



図表3－106　大畑の字一覧

臼井戸(ウスイド)	背戸林(セドバヤシ)
老平(オイダイラ)	尽苅(ツクシガリ)
大洞(オオボラ)	中尾(ナカオ)
上中畑(カミナカバタ)	中屋敷(ナカヤシキ)
上ノ田(カミノタ)	根岸(ネギシ)
上屋敷(カミヤシキ)	日向釜(ヒナタガマ)
茅置場(カヤオキバ)	古城跡(フルシロアト)
小沢入(コザワイリ)	仏ケ尾(ホトケガオ)
小屋ケ沢(コヤガサワ)	マナイタヒラ(マナイタヒラ)
沢入(サワイリ)	丸塚(マルヅカ)
下中畑(シモナカバタ)	向畑(ムカイバタ)
下ノ大窪(シモノオオクボ)	沢入(サワイリ)
下屋敷(シモヤシキ)	

戸数と人口

一八七五(明治八)年の「小区表編立調査」によれば、人口は九二人(男四四人・女四八人)となっている。戸数は家持一二戸、士族家持三戸であった。一八八八(明治二十一)年の「御宿村ほか一〇か村、自治区造成に関する諸表」では人口一一七人、戸数二一戸である。大正時代や昭和初期は富岡村としての統計で、大畑のみの数値はわからないが、一九二五年の「大正十四年度富岡村事務報告」では、人口一四五人、戸数一四戸となっている。

一九七五(昭和五十)年になると、人口は一五五人(男七五人・女八〇人)で、四二世帯である。人口はあまり変わらず世帯数が増えて、一世帯の平均成員が三人となっている。一九九〇年では、一六九人(男九一人・女七八人)で五六世帯となる。

生業

「小区表編立調査」の職分表では、人口九二人中農業に従事する者が五六人となっていて、農業主体であることがわかる。一八八六(明治十九)年の「御宿村外拾ヵ村地誌取調草案」では、田が二町七反八畝一一歩、畑が四町五反一畝一歩、山林反別九〇町九反八畝一四歩、原野四〇町二反五畝一五歩である。人々は農業に従事していて、地味は黒色で稲粱によく、茶や麦に適するとある。

行餘舎の分校と嶽南小学校

一八七二(明治五)年に学制が頒布され、御宿・金沢・上ヶ田・葛山・千福村は行餘舎を設立し、大畑村は定輪寺村、富沢村とともに定輪寺の分校を設置する。御宿の荘園寺を仮校舎にしていた行餘舎の校舎を新築することになり、行餘舎の分校に通学していた大畑村も連合して、一八八二(明治十五)年に本校舎が嶽南小学校と改名して落成する。しかし、新築費用が集められず、新築なった初等科教室を売却して補うこととなった。そのため、大畑の子どもたちは定輪寺にあった分校に通い続けることになる。一八八六(明治十九)年に学区が大幅に統合されることになり、定輪寺の分校は嶽南小学校に統合

され、富沢の子どもたちは御宿の嶽南小学校に通うことになった。

その後分校を統合した嶽南小学校は嶽南尋常小学校となり、後述するように再び分校をつくったり統合したりしながらも一九二九(昭和四)年に現在の富岡第一小学校の位置に移転改築した。一九四一(昭和十六)年には国民学校令によって富岡村国民学校と改称されたが、戦争が終わり一九四七(昭和二十二)年に富岡村立富岡小学校となった。一九五一(昭和二十六)年に下和田に富岡村立第二小学校が設立されて、町村合併により一九五七(昭和三十二)年富岡小学校は裾野町立富岡第一小学校と改称した。

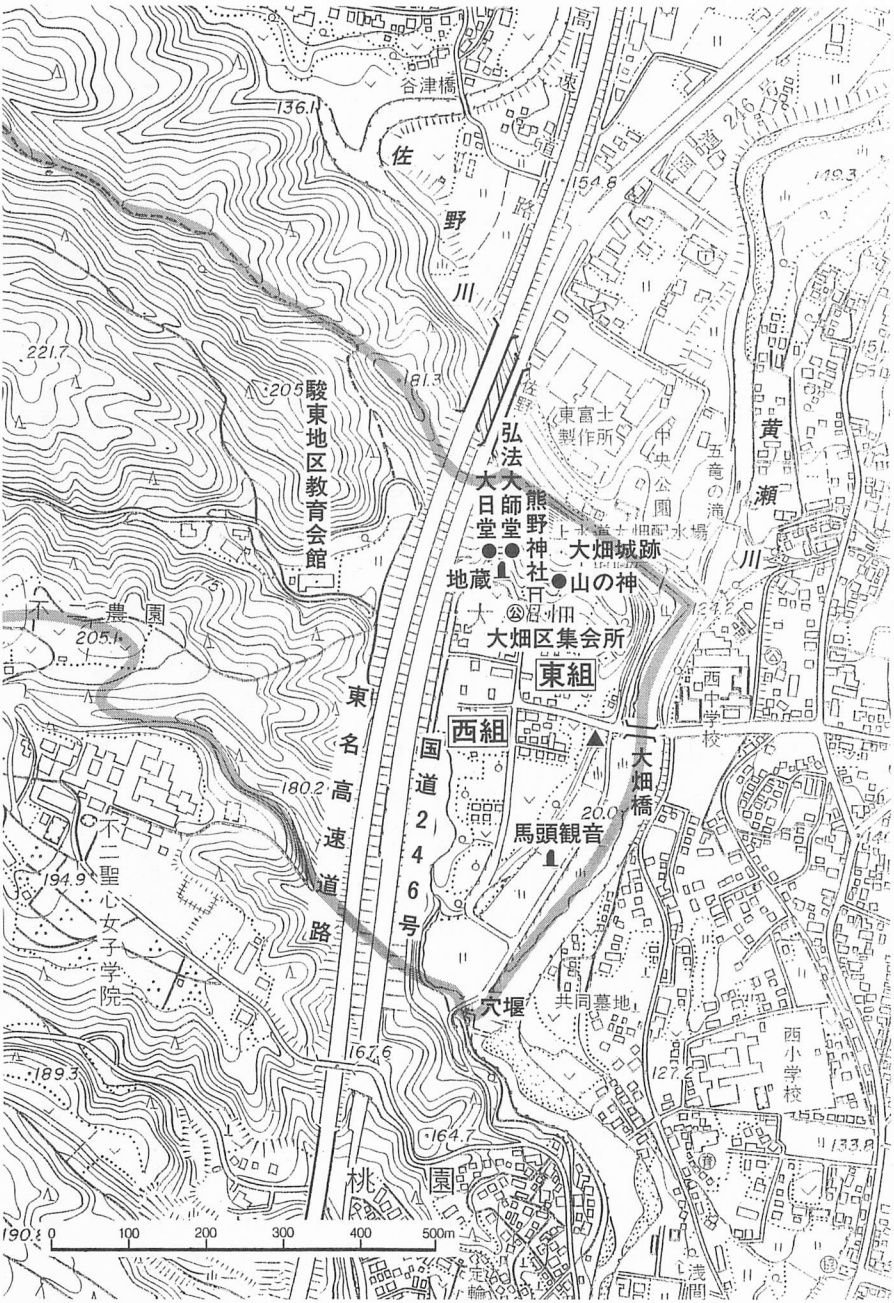
大畑の子どもたちは前述のように、学区としては嶽南小学校、富岡小学校に属する。しかし、現実にはかなりの遠距離通学になり、より近いところにある小泉小学校に通いたいという要望がくり返し出された。桃園(旧定輪寺)に一九二〇(大正九)年に岩下壮一によって私立の温情舎(おんじょうしゃ)の小学校がつくられると、富岡村が委託するかたちをとって、大畑・桃園の子どもたちの多くが通うことになった。一九二一(大正十)年の「富岡村事務報告」には、一九二〇年七月十五日に岩下壮一が私立学校設立の出願をし、翌二十一年八月十八日に県知事の認可がおりた。同年九月二十四日には一七名の保護者より私立学校に就学させたいという出願があって、同日認可した、とある。二〇年の嶽南小学校の児童数には大畑は一三名、桃園は七名とあるが、二一年には記載がなくなる。その後桃園は一人の記載もないが、大畑は少人数ながら児童数の記載がたびたびみられ、その後も嶽南小学校に通った人があったという。

一九五七(昭和三十二)年、富岡村が裾野町に合併されたことによって、大畑の子どもたちは裾野町立西小学校に通うことになった。

嶽南小学校の移転をめぐる対立

一九〇八(明治四十一)年、尋常小学校の義務教育年限が六年に延長

図表3－107　大畑の集落



されたことを契機に、富岡村内で北部の大字と南部の大字との間に対立が生じた。統合によって通学に不便を感じていた北部の人々が、小学校を富岡村中央部へ移転することを主張した。それに対して、大畑は千福、御宿、上ケ田、桃園(旧定輪寺)など南部の大字とともに移転に反対の立場をとった。南部と北部の対立は、小学校問題にとどまらず村政にもおよび、分村問題にまで発展したが、一九一七(大正六)年に非移転派から郡長に提出された陳情書では、大畑は桃園とともに中立派となったとある。移転派と非移転派の対立はさらに続くが、一九二八(昭和三)年に御宿の北よりに移転することで双方の合意を得、翌年嶽南小学校は移転し現在に至っている。

生活を支えた大畑橋

黄瀬川にかかる大畑橋は、古くから佐野の人々が愛鷹山の入会地や開墾地に通う重要な橋であった。さらに、大畑からは通学路や裾野駅への交通路として欠かせないものとなった。そのため、大畑や佐野の人々は何度も大畑橋をかけ替えたり、補強工事を行って、守り続けてきた。

かつて大畑橋は板を敷いた低い橋だった。夏に雨が降るたびに流され、その都度架け替える費用がかかるので、一九〇六(明治三十九)年に多額の費用をかけた大工事で新しい橋を架けた。

その橋も一九四一(昭和十六)年に未曽有の大出水に見舞われ、橋全体が流されてしまった。生活を支える橋だけに、仮り橋を架けてしのぎながら寄付を募り、一九四四(昭和十九)年新橋が竣工する。

一九五五(昭和三十)年には、大畑区長と佐野区長の連名で古くなった大畑橋の補強工事の申請書が出されている。翌五六年にも大畑区長によって補強工事の申請書が出されていて、「大畑橋は大畑と千福の一部から裾野町に通じるもので、区としては主要農産物、薪炭材の搬出、児童の通学、一般人の日常品購入、裾野駅に通じるなどのための唯一の主要道路である」とし

ている。

現在のコンクリート橋は一九八九年に完成したものである。

第三節　地域社会と生活

内部区分と区の役職　大畑は四五戸で、モヨリ(最寄)はない。村内を縦貫している道を境に、愛鷹山側が西組、黄瀬川側が東組となっている。このほかに、借家は南組、コロネットコーポの入居者がコロネット組、東富士製作所富士見寮は富士見寮組となっている。

区の役員は、区長・副区長・会計・自主防災会長・体育委員・区民セミナー委員などがある。このほかに、上記五つの組の組長各一名も役員である。

共有地　近世からの愛鷹山の入会地は明治以降も継承されていた。

一八七五(明治八)年に愛鷹山が一等官林に編入され、さらに一八八九(明治二十二)年には愛鷹山官林が御料地に編入されて、払下げを目的に愛鷹牧畜会社が設立された際に、大畑は原町(はらまち)ほか一〇か町村組合に参加して運動をした。この組合は一八九二(明治二十五)年には民有化をめざす組織として沼津町ほか一〇か町村組合になり、大畑も運動を続けた。結局民有化は困難と見て払下げ願を提出し、愛鷹山牧畜会社に貸与されていたおよそ三〇〇〇町歩は一八九九(明治三十二)年に払下げられた。

大畑はこの旧戸に関わる共有地のほかに、開墾で養蚕の桑や陸稲をつくっていたところを共有地としてヒノキの植林をしている。

教育会館・美化センター　集落の西側に駿東地区教育会館がある。老人福祉センターが移転したあと、一九九六年三月から教育会館として使用している。なお老人福祉センターは現在裾野市福祉保健会館内(石脇)にある。

写真3－116　山の神の祭り

教育会館から少し愛鷹山を登った所に裾野市美化センターがある。この美化センターは、現在の位置より少し下にあった清掃センターが、老朽化に伴い一九八八(昭和六十三)年五月に新清掃センターとして現在の地に新しく建てられたものである。

神社と堂

大畑には寺はなく、桃園の定輪寺を檀那寺とする二軒をのぞいて、千福の普明寺の檀家である。前述したように、大畑の神社やお堂はすべて集落の北端にかたまっている。氏神は熊野神社で、国常立命・伊邪那岐命・伊邪那美命を祭神とする。創建年月は不詳だが、一六九五(元禄八)年の棟札の写しがある。

熊野神社の境内に山の神がある。創建年月は不詳だが、一七二八(享保十三)年の棟札の写しがある。

大日堂は大日如来座像を安置している。この大日如来像は伝来にいくつかの口伝があり、昔千福村と佐野村と大畑村の三か村入会山である字仏顔という場所に安置されていたものを移した(「神社明細調」)とか、大幡寺が焼失したときに村人が運び出してここへ安置したなどといわれている。創建年月は不詳である。

弘法大師堂は弘法大師像を安置し、創建は一八六八(慶応四)年である。

祭りと講

大畑の信仰行事は旧戸で当番を受け持って行われる。

熊野神社の祭日は、一月十日である。山の神は一月

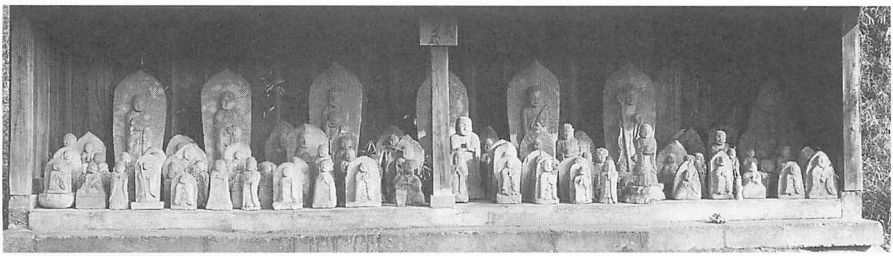


写真3-117　身代わり地蔵

十七日と十月十七日に山の神講で祭りをする。米の団子三個、洗米、オチャハン、塩、水、御神酒、魚とカケノオを供える。カケノオとは竹を節から節まで切り、その中央の皮を残して切り曲げて、御神酒の容器にしたものである。このほか、竹の弓矢と的を用意する。山の神の祠に参拝したあと、熊野神社と山の神の間の矢場で講員が一人ずつ矢を射て、三本ほど当たると終わりにし、直会をする。

大日堂の祭礼は四月の初申の午後で、鏡餅を一重ね供えて念仏をあげる。

弘法大師堂の祭礼は三月二十一日で、大日堂で弘法大師堂の方向に座って念仏をあげる。昔は大畑の弘法の縁日として有名で、近郷近在から人々が集まったという。

月並み念仏講があり、現在は毎月ではないが、本来は毎月二十七日に行う。不動尊の掛け軸をまつって、ご飯とサカキかコウバナと菓子などを供えて念仏をあげる。線香と灯明を焚き、かしわ(かしわ手)をする。

願かけの石造物　大畑橋の近く、集落の入り口となるところに一九〇四(明治三十七)年建立の道祖神がある。この道祖神のあたりには石がたくさんあるが、それを借りていって抱いて寝ると、子どもが授かるといわれる。

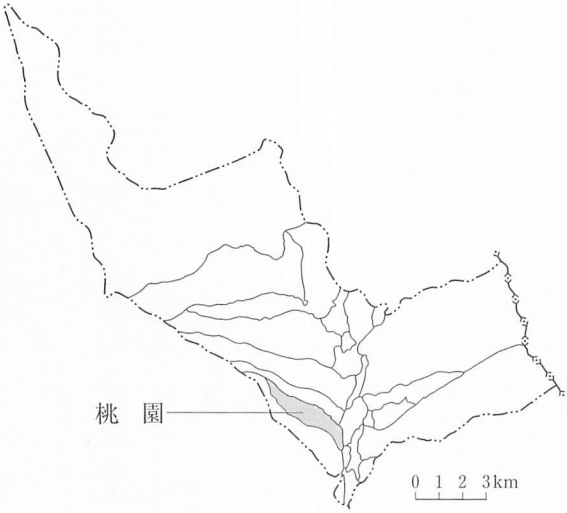
弘法大師堂南側には身代わり地蔵がある。疫病や悪い風邪がはやると、石屋で身代わりの地蔵をつくって

もらって、弘法大師堂の境内に奉納する。子どもの病気平癒を願って親が奉納するもので、無事に回復すると、賽銭を供えて礼参りをする。

第二四章　桃　園

第一節　地理的概要

図表3－108　桃園の位置



古刹定輪寺の村

桃園はかつて定輪寺村と名乗り、長く寺と七戸の門前集落で形成されてきた。定輪寺は中世には駿東一帯の曹洞宗の拠点であり、多くの文人などが立ち寄って当時の地方文化を担う役割を果たしていた。桃園という地名は、戦国時代の一五五一(天文二十)年に今川義元が発給した文書に「駿河国駿東郡大岡庄桃園定倫寺」とあり、古くから用いられていたが、村名としては近世初頭から定輪寺村であった。桃園となったのは一八九四(明治二十七)年以降である。

位　置

桃園は裾野市中心部から西の方向に位置する。愛鷹山位牌岳より南東に派出する尾根の海抜三八〇メートルの稜部を西端とし、長さ約四・一キロメートル、最大幅約〇・八キロメートルの狭長な三角形をした地区である。東は黄瀬川を隔てて佐野と対し、北と西及び南は大畑

と富沢に接している。

地形と土地利用　大部分はスギ・ヒノキの植林された山地であったが、尾根末端の舌状の平坦面は開墾されて畑地となり、その北側の大畑に接するところは不二農園という大規模な茶園が経営されていた。近年、この農園の中に不二聖心女学院という学校が建設されている。西と南側の富沢と接する平坦地はゴルフ場として開発された。

山麓の裾部に黄瀬川の形成した河岸段丘があり、定輪寺と門前集落があった。近年、その周辺は住宅地となり、また北と南の尾根末端の平坦地も住宅地となり、さらに集落と住宅地の西側を東名高速道路と国道二四六号が通過し、景観が大きく変わっている。河岸段丘の南半分は、穴堰の用水による水田となっていたが、ここも国道二四六号の通過によって旧状を失った。

集落の姿　かつては定輪寺との関係で七戸以上戸数を増やさないようにし、村内に分家を出さないようにしていた。そのため、大正期まで集落は定輪寺の西側と、南側の愛鷹山麓に七戸が並んでいるのみであった。

定輪寺山門のそばに桃薗神社があり、集落西南に御嶽神社と山神社がある。黄瀬川に沿って南北に村道が走り、南は富沢、北は大畑に通ずる。この道沿いの集落入り口に道祖神が建っている。

現在は河岸段丘全体が住宅地となり、愛鷹山麓にも住宅が広がっている。

第二節　歴史概要

1　中世以前

尾畑遺跡　愛鷹山麓の尾根末端には舌状地形の平坦面があり、ここには数多くの縄文時代遺跡が存在する。尾畑遺跡もその一つであり、一九六七

(昭和四十二)年、ここで住宅造成中に大量の土器が発見された。住居址と思われるものや、河原石を意図的に配置した遺構、河原石と木炭の集積されたところが検出され、縄文時代早期・前期・中期の土器と、ヒスイの有孔大珠(呪術的装身具)が出土した。中でも、顔面把手付土器、高さ七〇センチメートルにもなる大形甕形土器、ヒスイの大珠は、県下でも貴重な遺物とされている。

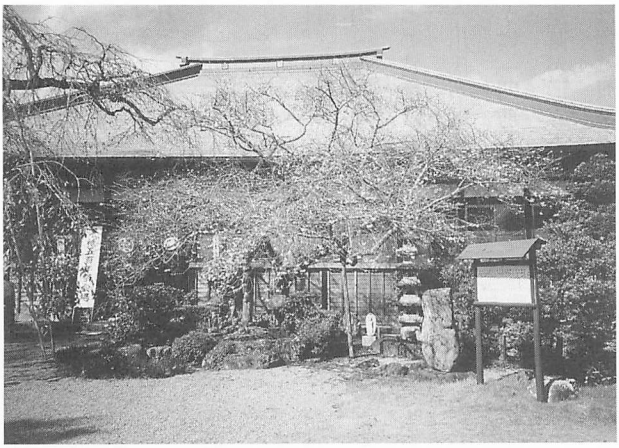


写真3-118　定輪寺

尾畑遺跡東側からも、集石土坑・土坑・堅穴状遺構・溝・柱穴二〇〇個が検出され、縄文時代早期と中期土器片、磨石・凹石・石鏃のほか、近世以降の陶器類、鉛鉄砲玉などが出土した。

以後、古代中世までは資料がないので明らかでないが、『駿河記』などの記述には古代から大岡荘に属していたとする。

定輪寺

一八七九(明治十二)年の「寺院明細帳」によると、定輪寺は古くは真言宗で、弘法大師(空海)の開創で、応永年間(一三九四～一四二八年)に住僧安思が寺を僧春屋宗能に譲り、一四二九(永享元)年に宗能が曹洞宗に改宗したとある。

さらに「重続日域洞上諸祖伝巻三」によると、一四七〇(文明二)年、大森氏一族安叟宗楞が定輪寺住職と

なっている。以後、定輪寺は市域のみならず駿東郡を代表する曹洞宗の拠点となった。多くの文人が出入し、一五〇二(文亀二)年には連歌師の宗祇が本寺に埋葬されている。

一五五一(天文二十)年、今川義元は定輪寺に寺領などを不入の地として安堵している。不入の地というのは、中世後半の領主が寺社に与えた諸役免除と、寺領内へ役人等が立ち入り指図をすることを禁じた特権で、この特権は有名な寺社に限られる。このことによって今川氏が定輪寺を重く見ていたことがわかる。このなかに「門前諸役免除之事」とあって、定輪寺門前には集落が形成されていたことがわかる。また寺領は、上は琵琶沢深山迄、下伝は智聖尾根之松嶺深山迄とある。これらの山中の地名は不明であるが、現在の桃園の地区よりも広かったと考えられる。

その後、一五六五(永禄八)年に今川氏真が定輪寺長老の林翁存桃に与えた判物によると、定輪寺内の僧侶の間に激しい対立があったことが知られる。定輪寺八代揚天宗播は、深良の興禅寺や小山町の興雲寺の開山ともなっている人物であるが、いったん住持を存桃に譲りながら、改めて七代住持であった明綱英賑に渡し直そうとした。これを存桃が訴え、今川氏が存桃に道理があると認めて奉行人を遣わせたところ、英賑が寺を焼き払おうとし、存桃に近い僧を切りつけたという。今川氏真が存桃を住持として認める判物を与えた一か月後に葛山氏元も同様の判物を与えている。その後、葛山・武田・徳川の支配をうけるが同様な権利を安堵されている。

定輪寺と宗祇

宗祇は諸国をめぐった著名な連歌師である。一五〇二(文亀二)年、弟子の宗長らを伴って関東を巡っている途中に発病し、箱根湯本に到達したときにはかなり容態が悪くなり、七月三十日ついに没した。享年八二歳であった。遺骸は足柄を越え、定輪寺に葬られた。

その様子が、宗長の『宗祇終焉記』に描かれている。宗祇の遺骸は輿に入れられて生きている人のように手を加えて運ばれた。夕暮れの鐘をつく時刻ころに定輪寺に着き、八月三日の曙に門前の少しはいったところにおさめて、松を好んでいた宗祇が常日頃言っていたように松を目印に植えて、塔婆を立てたという。

2　近世

支配の変遷

支配は一六三二(寛永九)年以降幕領、一六八〇(延宝八)年から小田原藩領となるが、一六八三(天和三)年から幕領に復帰する。一六九八(元禄十一)年からは旗本内藤氏の領知となって幕末に至る。旗本の知行は幕府の方針で、元禄の世直しといい、これまでの俸給ではなく旗本に知行を与えて自分賄いをさせたのである。内藤氏の陣屋は当初富士郡原田村に置かれ、後に同郡の比奈に移ったという。名主は千福村の名主が兼ねた。

村高と村の姿

一六〇三(慶長八)年(実は一六〇四か)「定輪寺村畑検地帳」、一六七二(寛文十二)年六月「駿河国駿東郡定輪寺田畑検地水帳」がある。村高は、正保郷帳では二一石五升九合で、このほかに桃園山定輪寺領五石がある。元禄郷帳以降は二七石四升四合であるが、これには五石の定輪寺領が含まれているものと思われる。

定輪寺の寺領については、一六〇一(慶長六)年霜月二十三日の代官井出正次の寺領手形で認められている。さらに翌〇二(慶長七)年に家康からの寄進状をうけている。また、一六一四(慶長十九)年に長野九左衛門清定から、一六一九(元和五)年には今宮惣左衛門から諸役免除手形をうけている。

一六八六(貞享三)年の「定輪寺門前者寺内法度等につき請書」によると、定輪寺が村の山林原野から田畑までを支配していたので、村人は門前者と呼ばれ、寺内の木竹枝の伐採や無許可の田畑の開墾を禁止され、

山林見回りを義務づけられていた。『駿東郡富岡村誌』の明治維新前の部に、戸数は七戸で、それはこの村誌が書かれた大正初期もおなじであるとし、寺領二〇〇町歩の山林を伐採して少なくとも一年に一〇〇駄の薪を得、また屋敷地が無税なので村民の経済ははなはだ裕福であるという。また、戸数がわずかなので隣保助け合いの美風があるという。

定輪寺内には宗祇の墓があるため、その歌碑や、茶畑村柏木官里、富沢村渡辺虎杖などの地方文人たちによる灯籠が奉納されている。このほか、境内に桃園貞純親王をまつる桃薗神社がある。

『富岡村誌』によると、「定輪寺村は安永元年より前は桃園村といっていたが、その後定輪寺村となった」という。なお、桃園村といっていたのは安政元年より前の一時期であって、その年代は明確には分かっていない。

3　近現代

行政区分の変遷　定輪寺は、一八七二(明治五)年には大区小区制によって第一大区五の小区に編入されるが、七四(明治七)年の大区小区制の再編により、水窪をのぞいた市域の村々とともに第一大区三小区に編入される。この三小区は三つの村連合で構成され、定輪寺は「今里村ほか一〇か村」の村連合に属し、戸長三人と副戸長一一人が置かれた。

しかし、一八七八(明治十一)年には郡区町村編制法によって再び二三か村となり、近世以来の定輪寺村が復活し民選の戸長が置かれることになる。さらに、一八八四(明治十七)年には戸長公選制を廃止し、戸長の官選と戸長役場管轄区域の整理統合がなされた。これによって定輪寺村は「御宿ほか一〇か村」に組み入れられ、戸長役場は御宿村に置かれた。

一八八八(明治二十一)年、市制町村制が公布され、

図表3－110　桃園の字

図表3－109　桃園の字一覧

入ノ洞(イリノホラ)
尾畑(オバタ)
欅坂(ケヤキザカ)
下耕地(シモゴウチ)
細窪(ホソクボ)
村下(ムラシタ)
山下(ヤマシタ)
山田(ヤマダ)

翌八九(明治二十二)年四月に施行された。定輪寺は、下和田村、今里村、金沢村、上ケ田村、御宿村、葛山村、千福村、大畑村とともに富岡村に属した。このとき旧二四か村は大字と称されるようになった。富岡村は、須山村と町村組合を設け、須山村富岡村組合村となった。組合村役場は富岡村に置かれ、組合長も富岡村出身者が務めた。その後、一八九九(明治三十二)年に町村組合を解消し、富岡村は独立した行政村となった。

定輪寺は近世の定輪寺村を継承して、町村制で「大字定輪寺」となっていたが、一八九四(明治二十七)年十月に桃園と改称する諮問案が村会で可決され、手続きがなされることになった。これは、住民の希望によるもので、大字定輪寺が寺院の定輪寺と「屢々公私ノ呼称ニ錯雑ヲ極メ将来紛擾ヲ来スノ基」になりかねないということが、その理由であった(「富岡須山組合村村議諮案書綴」)。

一九五二(昭和二十七)年に小泉村と泉村が合併して裾野町となり、さらに一九五六(昭和三十一)年には深良村が裾野町に合併する。富岡村は、一九五七(昭和三十二)年に須山村とともに裾野町に合併して裾野町になった。一九七一(昭和四十六)年に市制が施行され、現在の裾野市になった。

戸数と人口

一八七五(明治八)年の「小区表編立調査」によれば、人口は五三人(男二九人・女二四人)となっている。戸数は家持七戸であった。一八八八(明治二十一)年の「御宿村ほか一〇か村、自治区造成に関する諸表」では人口四一人、戸数七戸である。大正時代や昭和初期は富岡村としての統計で、桃園のみの数値はわからないが、一九二五年の「大正十四年度富岡村事務報告」では、人口八九人、戸数二二戸となっている。近世から変わらなかった戸数に、初めて変化が見られる。

一九七五(昭和五十)年になると、人口は一三三八人

(男五二七人・女八一一人)で、三九七世帯で、人口、戸数とも非常に増加している。一九九〇年では、一三六三人(男五三八人・女八二五人)で三七一世帯となる。

生業

「小区表編立調査」の職分表では、人口五三人中農業に従事する者が二四人となっていて、農業主体であることがわかる。このほかは僧が六人いる。一八八六(明治十九)年の「御宿村外拾カ村地誌取調草案」では、田が三町八反七畝七歩、畑が三町七反五畝二八歩、山林原野一町四反二畝二九歩である。人々は農業に従事していて、米麦を産すとある。

嶽南小学校・温情舎・西小学校

一八七二(明治五)年に学制が頒布され、千福、上ケ田、御宿、金沢、葛山村は行餘舎を設立し、定輪寺村は大畑村、富沢村とともに定輪寺の分校を設置する。御宿の荘園寺を仮校舎にしていた行餘舎の校舎を新築することになり、行餘舎の分校に通学していた定輪寺村も連合して、一八八二(明治十五)年に本校舎が嶽南小学校と改名して落成する。しかし、新築費用が集められず、新築なった初等科教室を売却して補うこととなった。そのため、定輪寺村の子どもたちは定輪寺の分校に通い続けることになる。一八八六(明治十九)年に学区が大幅に統合されることになり、定輪寺の分校は嶽南小学校に統合され、定輪寺の子どもたちは御宿の嶽南小学校に通うことになった。

その後、いく度もの制度的変更、名称変更があり、桃園は町村合併まで富岡小学校の学区に属した。

桃園の子どもたちは前述のように、学区としては嶽南小学校、富岡小学校に属する。しかし、現実にはかなりの遠距離通学になり、より近いところにある小泉小学校に通いたいという要望が繰り返し出された。桃園に一九二〇(大正九)年に私立の温情舎の小学校ができると、富岡村が委託するかたちをとって、桃園・大畑の子どもたちの多くが通うことになった。一九二一(大正十)年の「富岡村事務報告」には、一九二〇年七

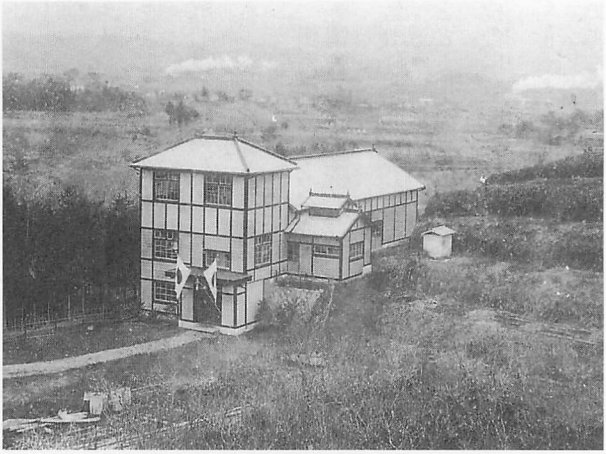


写真3－119　温情舎(不二聖心女子学院所蔵)

月十五日に岩下壮一が私立学校設立の出願をし、翌二一年八月十八日に県知事の認可がおりた。同年九月二十四日には一七名の保護者より私立学校に就学させたいという出願があって、同日認可した、とある。二〇年の嶽南小学校の児童数には桃園は七名、大畑は一三名とあるが、二一年には記載がなくなる。

一九五七(昭和三十二)年、富岡村が裾野町に合併されたことによって、桃園の子どもたちは裾野町立西小学校に通うことになった。さらに一九七一(昭和四十六)年の市制施行により、町立西小学校は裾野市立西小学校となって現在に至る。

嶽南小学校の移転をめぐる対立　一九〇八(明治四十一)年、尋常小学校の義務教育年限が六年に延長されたことを契機に、富岡村内で北部の大字と南部の大字との間に対立が生じた。統合によって通学に不便を感じていた北部の人々が、小学校を富岡中央部へ移転することを主張した。それに対して、桃園は千福、御宿、上ケ田、大畑など南部の大字とともに移転に反対の立場をとった。南部と北部の対立は、小学校問題にとどまらず村政にもおよび、分村問題にまで発展したが、一九一七(大正六)年に非移転派から郡長に提出

された陳情書では、桃園は大畑とともに中立派となったとある。移転派と非移転派の対立はさらに続くが、一九二八(昭和三)年に御宿の北よりに移転することで双方の合意を得、翌年嶽南小学校は移転改築された。

鈴木農場　現在、大畑との境の愛鷹山麓にある不二農園は、かつて鈴木農場として広く茶畑などを営んでいた。『駿東郡富岡村誌』によると、鈴木農場は、一八六八(明治元)年に大畑在住の徳川旗本が所有してもっぱら製茶業を営んでいたものを、一八八二(明治十五)年ころに黒田久孝が手に入れ、それを一九〇〇(明治三十三)年に鈴木藤三郎が購入したことに始まる。明治維新で家禄などを失った士族が茶園を営むことは県内では珍しいことではない。

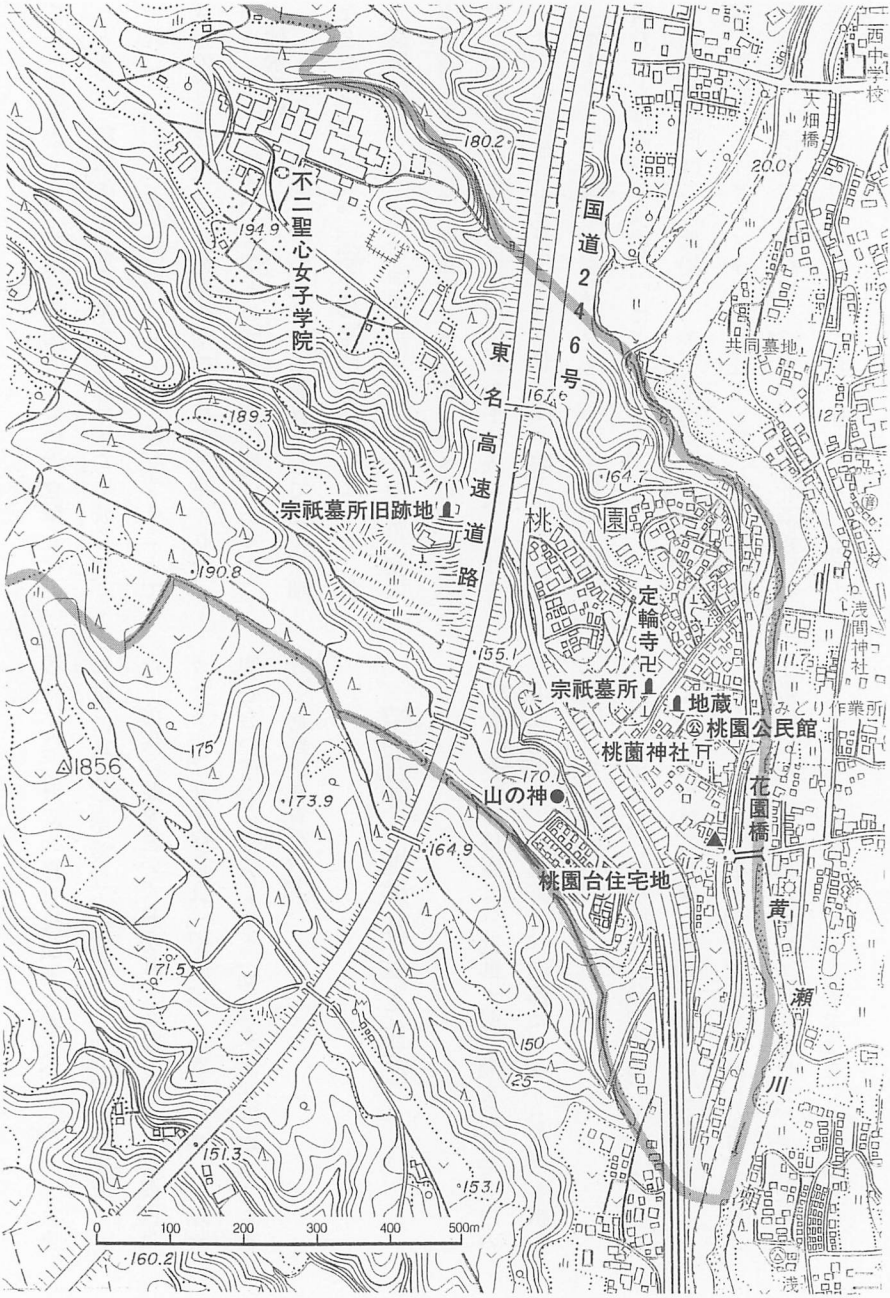
鈴木藤三郎はこの農場で、茶を主産物に、果樹、蔬菜、牧畜、スギやヒノキの植林などを行った。その後、北浜銀行の頭取であった岩下清周(いわしたきよちか)が、当時北浜銀行の担保であった農場を請け出して移り住み、不二農園と名付けた。農園の経営は順調に進み、一九二〇(大正九)年に私立学校設立の出願をして温情舎が創立された。清周の跡を継いだ長男壮一が没したのち、農園はカトリック女子修道会「聖心会」に寄付された。以後聖心会の所有地となり不二聖心女子学院がある(『裾野』裾野市教育委員会)。

第三節　地域社会と生活

内部区分と区の役職　桃園は、近世・明治期を通じて七戸の小集落で、内部にモヨリ(最寄)も組も必要ではなかった。

表3-112は現在の桃園の区分である。このようになっていったのは、急速な市街化で戸数が急増したことによる。まず、戸数が増えたことで組に分け、それが十数組になったために地域で班に分けた。そのため、班ごとに一から組番号がつく形ではなく通し番号にな

図表3－111　桃園の集落



っている。さらに、一班が二つに分かれた。他の大字に見られる最寄と組の成り立ちとは全く違う形成がなされたといえる。その後、戸数が増えるたびに組がつくられていき、組番号は組のできた順につけられたので、大きな数字の組は規則なく班に加えられている。

区の役員は、区長・副区長・会計各一名、理事八名、会計監査二名、参与三名が定められている。

また、聖心班をのぞく各班に班長が置かれ、班ごとに防災委員・衛生委員・交通安全委員各一名がいる。

図表3－112　桃園の内部区分

区	班	組
桃園	一班A	1～3・15・26 サンハイツ・法人 コーポ高崎
	一班B	16・17・22・23 25・東名C
	二	4～9・24
	三	10～14
	四	19・20
	聖心	

これら委員の委員長は理事が務め、理事はそのほかゴミ減量推進委員・総務・文書事務・公民館管理・街灯・公民館活動・遊園地・青少年育成・道・水路・広報の委員を兼任している。このほかに桃明会（とうめいかい）（老人会）会長、子ども会会長などの各種団体長が置かれている。

組の多くに組長が置かれて（組長を置かない組は七つ）、それらの組には体育委員各一名が定められている。体育委員は区の運動会の役員で、体育委員長は理事が務める。なお、運動会と神社祭典当番は一班Bと四班が合同し、全体で四つの班に分かれて行う。

桃薗神社と御嶽神社

「神社明細調」によると、桃薗神社は桃園親王と号した貞純親王を祭神とし、一七九四（寛政六）年に創建された。文書中の「古老の口碑」には、貞純親王が千福村の山城に住んでいて亡くなったので、定輪寺境内続きの山中に埋葬し、石の祠を建てたと伝えている。桃園親王塔は、一九〇四（明治三十七）年に鈴木農場内の山中で発見され、発見

写真3－120　桃薗神社の祭り

の経過を刻んだ石碑とともに桃薗神社境内に納められている。

桃薗神社の祭礼は、従来十月九日であったが、近年九日より前の日曜日となった。神社で式典をして、神輿が出る。

桃薗神社には区の公民館が隣接している。一九七六(昭和五十一)年に区で協議し、氏子総代が神主に頼んでこのように建てることになったのである。公民館には弘法大師像と掛け軸があり、毎月二十日の大師講が行われる。

御嶽神社は、「御嶽神社縁起」の碑によれば、大国主ノ神・開運繁盛ノ神・少名彦ノ神・薬種健康ノ神を祭神として、一七五六(宝暦六)年に定輪寺住職が愛鷹山の安泰や村人の無病息災などを祈願して、木曽の御嶽神社から分神してきたものである。後に不二農園の敷地内になり、岩下清周が信仰の違いのために村人に守護を委託し、七戸の共有地であった現在地に移転した。そばに山神社がある。

宗祇にゆかりの石造物　定輪寺入り口には羅漢や地蔵菩薩があり、境内には宗祇の墓所である宝篋印塔がある。

ここに、一七九二(寛政四)年七月二十九日に宗祇の三百年遠忌を記念した碑と灯籠がある。碑は遠忌に当たって宗祇の霊前に手向けられた俳諧を、富沢村の渡辺虎杖が書き留めたものである。また、一八〇一(享和元)年の三百年遠忌記念碑は、江戸と三島の文人などによって建てられており、宗祇遠忌が地元のみならず、広くこの時代の文人たちの関心事であったといえよう。

写真3-121　宗祇五百年祭記念句碑除幕式
(杉山義則氏所蔵)

二〇〇〇年十月には宗祇五百年祭として法要や記念行事が行われ、句碑「世こそ秋ふじはみゆきの初嵐」の建立や宗祇墓所旧跡地の整備がはかられた。

花園(はなぞの)橋近くには、一七二一(享保六)年の道祖神のほかに、八体の馬頭観音などがある。